

本学体力テスト小史

A Brief History of Physical Fitness Testing at TWCPE

キーワード：学校行事，形態，機能，運動能力

Keywords: school events, form, function, athletic capability

掛水 通子 及川 佑介 烏賀陽 信央 永井 将史
長谷川 千里 筒井 孝子 大石 千歳

KAKEMIZU Michiko OIKAWA Yusuke UGAYA Nobuhisa NAGAI Masashi
HASEGAWA Chisato TSUTSUI Takako OISHI Chitose

はじめに

1902(明治35)年5月に設置された私立東京女子体操学校は、私立東京女子体操音楽学校、東京女子体育専門学校、東京女子体育短期大学と発展してきた。そして、短大に加えて、新たに1962(昭和37)年1月に東京女子体育大学が設置され、4月に授業を開始した。

女子体育研究所は、大学設置時に大学の附属機関として設置された。現在、体力テストは学生全員が参加する学校行事として位置付けられており、女子体育研究所の事業のなかの一つになっている。かつては運動会や体育祭も学校行事として活発に行われていたが、それらは学園祭である藤園祭のなかのスポーツ大会として小規模なものになり、全学生が参加しているとは言い難い行事となっている。したがって、体力テストは全学生が参加する本学唯一の学校行事である。

先行研究の検討

これまでの本学の体力テストに関する先行研究では、測定結果の分析が主となっている。和泉(1966)は1962(昭和37)年の、川口(1968)は1962(昭和37)年から5年間の、片山(1972)は1962(昭和37)年

から10年間の、若山ら(2011)は1970(昭和45)年から2010(平成22)年の測定結果や体格や体力の推移を分析している。また、鯛谷ら(1984)は、学生の3年間の変化を、若山ら(2013)は女子競技スポーツ選手の体力標準値と競技別体力特性を明らかにしている。

また、本学紀要3号(1968)、17号(1982)、18号(1983)、22号(1987)にも体力テスト結果が掲載されており、3号は体育測定研究室名であるが、17号からは女子体育研究所名での報告となっている。

本学体力テストはその実施方法を変えながら、長期間全学挙げて実施されているが、『藤村学園100年のあゆみ』や『藤村学園創立110周年記念東京女子体育大学・東京女子体育短期大学この10年のあゆみ2002-2012』等の「学園史」の記述は十分ではなく、女子体育研究所運営委員兼研究員であるわれわれも、その変遷を把握できなくなっている。1985(昭和60)年度からは『体力テスト報告書』、1998(平成10)年度からは『新体力テスト報告書』が発行されており歴史を辿ることができるが、報告書が残されていても、体力テストを巡る考え方などはわかりにくい。

そこで、体力テスト結果の分析は60年など節目の年の研究員に委ねることにして、本研究では、体力テストの運営方法、測定項目の変遷、結果の分析方法、体力テストを巡る考え方などを明らかにすることにする。

研究目的

本研究の背景には、大学設置時に大量に採用された教員はすでに全員退職し、本学設立時とその後の10年ほどの間に本学を卒業した本学教員や卒業生以外の教員の退職が続き、間もなく大学設置後の十数年を知る教員はいなくなるという状況がある。

本研究の目的は、日本および世界の体力テスト概史を理解した上で、本学体力テスト小史を明らかにし、今後の体力テストに生かそうとすることである。主たる研究内容は体力テスト運営方法、測定項目の変遷、結果の分析方法、学生や教員の体力テストに対する考え方などである。

研究方法

史料と聞き取り調査（一部は質問内容に基づいて本人が記載）を併用した。

史料は体力テスト関係書、女子体育研究所が1985（昭和60）年から1997（平成9）年まで発行した『体力テスト報告書』、1998（平成10）年から2017（平成29）年まで発行した『新体力テスト報告書』、1958（昭和33）年から報告書発行の前年である1984（昭和59）年までの『卒業アルバム』等を用いた。

聞き取り調査は学生および本学教員として体力テストに関わった卒業生13人、卒業生ではない本学教員1人、旧・現女子体育研究所所長や所員（現在は運営委員と称す）4人合計18人を対象として計画したが、調査依頼の過程で、1人が加わり19人となった。また、予定した卒業生の教員経験者1人から、その教員の同級生で、本学教員を経験していない卒業生が体力テストのことを覚えているとの推薦を受け、交替した（表1の人物番号A3）。19人のうち4人はあらかじめ用意した質問に対して本人が記述する形を取ることになったため、聞き取り調査14人、質問内容に基づいて本人が記述5人となった。区分中、卒業生と女子体育研究所関係者のなか（人物番号AとC）の1人、卒業生以外の教員と女子体育研究所関係者のなか（人物番号BとC）の1人合計2人は同一人物なので、実際の合計人数は17人である。

調査は研究代表者から事前に、調査対象者に対して調査の依頼をして承諾を得たうえで、2018（平成30）年10月31日から12月18日の間に掛水通子・及川佑介・鳥賀陽信央・永井将史・長谷川千里・筒井孝子の6人により実施された。調査対象者、調査者および調査日は表1に示した。

表1 聞き取り調査対象者と調査日

番号	区分	人物番号	入学年または運営委員等任期	調査方法	調査日
1	元本学教員	A1	1961（昭和36）年入学	聞き取り調査	平成30年12月10日
2		A2	1962（昭和37）年入学	聞き取り調査	平成30年10月31日
3	元中高教員	A3	1965（昭和40）年入学	聞き取り調査	平成30年11月21日
4	卒業生 現在 本学教員	A4	1966（昭和41）年入学	聞き取り調査	平成30年11月7日
5		A5	1967（昭和42）年入学	聞き取り調査	平成30年11月14日
6		A6	1970（昭和45）年入学	聞き取り調査	平成30年11月23日
7		A7	1972（昭和47）年入学	聞き取り調査	平成30年11月20日
8		A8	1972（昭和47）年入学	聞き取り調査	平成30年11月15日
9		A9	1983（昭和58）年入学	聞き取り調査	平成30年11月9日
10		A10	1985（昭和60）年入学	聞き取り調査	平成30年11月16日
11		A11	1989（平成元）年入学	聞き取り調査	平成30年11月20日
12		A12	1997（平成9）年入学	質問内容に基づいて本人が記述	平成30年12月5日
13		A13	1999（平成11）年入学	聞き取り調査	平成30年11月14日
14	本学教員	B1	1975（昭和50）年着任	質問内容に基づいて本人が記述	平成30年12月18日
15	女子体育研究所関係者 元・現所長	C1	2001（平成13）年度から2002（平成14）年度	聞き取り調査	平成30年12月10日
16		C2	2005（平成17）年度から2008（平成20）年度	聞き取り調査	平成30年11月28日
17		C3	2009（平成21）年度から2014（平成26）年度	質問内容に基づいて本人が記述	平成30年11月14日
18		C4	2015（平成27）年度から2018（平成30）年度	質問内容に基づいて本人が記述	平成30年12月18日
19		元運営委員	C5	2011（平成23）年度から2014（平成26）年度	質問内容に基づいて本人が記述

注)聞き取り調査の場所は全て学内の研究室等であるが、特定されるので記載しなかった。

調査にあたって、調査結果は2019(平成31)年1月23日開催予定の第13回東京女子体育大学・東京女子体育短期大学研究フォーラムで発表後、東京女子体育大学研究所所報13号に掲載される予定であること、聞き取り調査の結果が全て発表される訳ではないこと、発表の際は個人名が特定されないよう配慮すること、調査結果はこの研究以外では使用しないことを断り、答えたくない場合は答えなくていいこと、疲れたらいつでも中止することを確認したうえで、本学内研究室等で実施した。

本研究は東京女子体育大学研究倫理委員会の「承認」(承認番号:「研倫審・平30-28号」)を得て実施された。

(掛水 通子)

1. 体力テスト概史

近代日本における体力テストは1878(明治11)年に体操伝習所でG. A. Lelandによって導入された活力検査が始まりとされる(波多野, 1995; 木下, 1995)。その系譜として1897(明治30)年に学生生徒身体検査規定が定められ、その後1900(明治33)年に学生生徒及幼児身体検査規定に改訂され(波多野, 1995; 木下, 1995; 松井・田村, 1995)、さらに1920(大正9)年、1927(昭和2)年、1937(昭和12)年と実施に伴う経験等により改正されていき(松井・田村, 1995)、1958(昭和33)年に健康診断へと代わった(木下, 1995)。同時期の1925(大正14)年に日本体育連盟が競技検査を制定(木下, 1995)、翌1926(大正15、昭和元)年に同連盟による競技検査が体育デーに行われたことや、1938(昭和13)年に大日本連合青年団の組織下で青年団体力検査が行われた記録がある(今村・宮畑, 1976)。この競技検査はアメリカのAthletic Badge Testを翻訳した舶来テストであり、1930(昭和5)年に日本体操連盟(体操協会の前身)に移管され、1931(昭和6)年の日本的修正を経て、1937年の体力検査へと連なった(木下, 1995)。さらに木下(1995)は陸軍戸山学校において第一次世界大戦勃発時の1914(大正3)年では欧米との体力比較が皆無であったが、大戦後の1922(大正11)年に

は世界的な趨勢である運動能力強化問題が指摘されたとしている。1924(大正13)年に陸軍戸山学校の学生対象の運動能力調査には体力診断的種目が姿を消し、運動能力テストの性格を鮮明にしたとしており、その後も試験研究され、1934(昭和9)年に下士官兵ノ運動能力標準として各師団教育主任参謀に配布されたと報告している(木下, 1995)。この下士官兵ノ運動能力標準と日本体操連盟の体力検査が後の体力章検定へと連なった(木下, 1995)。

その後、国民体力法が1940(昭和15)年に施行され(松井, 1995; 松井・田村, 1995)、これに前後する形で厚生省・文部省の管轄下において1939(昭和14)年に体力章検定制度が実施され(対象は15-25歳の男子青少年、女子は1943(昭和18)年より実施、対象は15-21歳)、1945(昭和20)年の第二次世界大戦終了まで行われた(今村・宮畑, 1976; 北沢, 1976; 宮下, 1995; 山田, 1941)。測定項目は男子が100m走、2000m走、走幅跳、手りゅう弾投、運搬(50m折返100m、重量30または40kg)、懸垂、水泳、行軍であり、女子は1000m走、縄跳、短棒投、運搬(50m折返100m、重量片手8kgの両手で16kg)、体操であった(宮下, 1995)。当時の社会情勢として世界第一次大戦を経て、各国が青少年の身体的適正を重視し、国家として国民体力の強化などを目的に同様の体力章検定が行われていた(今村・宮畑, 1976; 北沢, 1976)。各国(ドイツ、ソビエト連邦、スウェーデン、フランス)の体力章検定は測定項目や標準は一樣ではないものの、走・跳・投・懸垂・運搬・水泳など基本能力種目を中心となっているのは共通であったと記されている(今村・宮畑, 1976; 野口, 1966)。

戦後、文部省は1949(昭和24)年に小学校3年-高等学校3年の全国の児童・生徒を対象にランダム標本抽出法により運動能力検査を行い、以後1954(昭和29)・1957(昭和32)・1959(昭和34)年と実施した(今村・宮畑, 1976; 加賀谷, 1995)。この調査について宮下(1995)は予備調査であり、その後のスポーツテストが制定されたとしている。また、1949(昭和24)年には日本体育協会がスポーツ・バッジ・テストを制定し、運動種目別テストとしてのわが国最初のものを試みた(今村・宮畑, 1976)。さらに1953(昭

和28)年に日本体育学会は運動適性検査を作成して運動の基礎要因を明らかにする研究を試みた(今村・宮畑,1976). 1959(昭和34)年には国立競技場スポーツテストが開設され,中学生以上の人すべてに開放された(今村・宮畑, 1976). 1961(昭和36)年にはスポーツ振興法が成立し,この施策の一環として文部省(現文部科学省)は体力・運動能力調査(スポーツテスト)を1964(昭和39)年から実施している(加賀谷, 1995;文部省, 1965). 同時期の各国の体力テストは,第二次世界大戦前の国防・強兵といった国家的立場による考え方を継承する(測定項目の一部に戦技を含む)ソビエト連邦などの共産圏諸国の体力テストと,戦後に生じてきた国民の体力・健康問題等も課題とする新しい体力テストの流れがアメリカなどの西側諸国で見られるようになってくる(野口, 1966). 同時に体力テストの国際的な標準化への取り組みが始まり(飯塚, 1964),国際体力テスト標準化委員会がその後10年ほどかけて標準体力テストの実施要領をまとめたと報告されている(石河, 1973). この標準体力テストの実施要領は後の新体力テストの測定項目(上体起こしなど)に影響したと推察される.

文部省の体力・運動能力調査は1964(昭和39)年のスポーツテスト(体力診断テスト,運動能力テスト,競技種目別テスト(選択),対象12-29歳)開始から,1965(昭和40)年に小学校スポーツテスト(対象10・11歳)の追加,1967(昭和42)年に壮年体力テスト(対象30-59歳)の追加,1983(昭和58)年に小学校低・中学年運動能力テスト(対象6-9歳)の追加,1999(平成11)年からは新体力テストを導入し,現在に至っている. これらのテストで実施されている測定項目については文部科学省が比較表を作成している(文部科学省, 2008a)(表2). さらに,2008(平成20)年からは全国体力・運動能力,運動習慣等調査も実施している(文部科学省, 2008b). なお,各国の体力テストについて,アメリカでは全米保健体育学会(AAHPER, 1980年よりAAHPERD)の実施する体力テストが日本同様に1957年から変更を加えながら継続されており,ヨーロッパでは1988年に欧州共同体(EU)のスポーツ発展局がEuro-fitテストを作成し,実施されている(波多野, 2013;水野1997). カナダではカナダス

表2 テスト項目の比較表

従前のテスト		新体力テスト(平成10年度~)
6~9歳 (昭和58年度~)	10・11歳 (昭和40年度~)	6~11歳
50m走 立ち幅とび ソフトボール投げ とび越しくぐり 持ち運び走	握力 立位体前屈 50m走 走り幅とび ソフトボール投げ 反復横とび(100cm) 踏み台昇降運動	握力 上体起こし 長座体前屈 50m走 立ち幅とび ソフトボール投げ 反復横とび(100cm) 20mシャトルラン(往復持久走)
	斜懸垂腕屈伸 ジグザクドリブル 連続さか上がり 垂直とび 背筋力 伏臥上体そらし	
12~29歳 (昭和39年度~)		12~19歳
握力 立位体前屈 50m走 走り幅とび 反復横とび(120cm) ハンドボール投げ 持久走(男子1500m, 女子1,000m) 踏み台昇降運動 垂直とび 背筋力 伏臥上体そらし 懸垂腕屈伸	握力 上体起こし 長座体前屈 50m走 立ち幅とび 反復横とび(100cm) ハンドボール投げ 持久走(男子1500m, 女子1,000m) または20mシャトルラン(往復持久走)	
30~59歳 (昭和42年度~)		20~64歳
握力 反復横とび(100cm) 急歩(男子1500m, 女子1,000m) 垂直とび ジグザクドリブル	握力 反復横とび(100cm) 急歩(男子1500m, 女子1,000m) または20mシャトルラン(往復持久走)	上体起こし 長座体前屈 立ち幅とび
		65~79歳
		ADL(日常生活活動テスト) 握力 上体起こし 長座体前屈 開眼片足立ち 10m障害物歩行 6分間歩行

(注)太字はテスト項目の継続を表す.

文部科学省(2008a)「平成20年度体力・運動能力調査」の概要,
参考資料:資料2. スポーツ庁HPより引用
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/kodomo/zencyo/1368269.htm(参照日2019年1月11日).

スポーツ科学学会(CASS)が開発した高校生以上を対象としたカナダ標準体力テストとカナダ保健体育レクリエーション学会(CAHPER)が開発した子ども対象のカナダ体力章(CFA)プログラムがある(山口, 1997). アジアでは中国が国家体育鍛錬標準, 全国学生体質健康調研, 中国成人人体質測定標準など, 韓国が体力章制度, タイでは日本のスポーツ少年団体力テスト, マレーシアはThe Malaysian Physical Fitness Tests, シンガポールはNational Physical Fitness Awardが行われている(桜井, 1997).

また, 大学体育と体力テストについて笹島(1978)は主として大学体育協議会の母体となった大学体育研究会(旧制の9大学で組織)の体力テストが1949(昭和24)年, 次に大学体育協議会が実施を強く要請した文部省の体力テストが1964(昭和39)年, そして大学体育連合の体力テストが1977(昭和52)年にそれぞれ定められたとしている. これらの背景として石田(1983)は1948(昭和23)年の大学基準協会々報第3号および第4号「大学における体育」「新制大学における一般体育設置の参考資料」, さらに大学基準協会々報37号別冊「大学における保健体育の在り方」によって大学体育の教育方法, 特に体育実技の実施にあたって体力検査の実施と結果に基づく体育運動の実施が求められていることから, 体力テストの実施が不可欠であったとしている. 青山(1978)は東京大学における体力テストについて男子は1966(昭和41)年度, 女子で1972(昭和47)年度より実施し, その目的としては正課体育実技のグループ分けとしてのスクリーニングテストの一環であったとしている. この他にも東京工業大学(桐生, 1978), 横浜市立大学(遊佐, 1978), 日本医科大学(酒巻, 1978), 藤女子大学(井上, 1978), 法政大学(山田1978), 神奈川大学(鎌田, 1978), 大分大学(平野, 1978), 芝浦工業大学(三浦, 1978), 香川大学(上杉, 1978)など多くの大学での実施が1978(昭和53)年に報告されている. 中でも法政大学は1952(昭和27)年より実施していた点(山田1978)や, 日本医科大学では医師として体育実技のみでなく測定法も含めた保健としての体力測定法を課しているなど(酒巻, 1978), 各大学の特色も記されている.

本学は1962(昭和37)年より独自の体力・運動能力調査を実施しており, 1964(昭和39)年に一部項目の測定方法を訂正しながら現在まで文部科学省の行う体力・運動能力調査に準じる形で実施してきた(和泉, 1966; 川口, 1968). また上述の医科大のように体育大学として検者として学生が測定法を学んできたことも記されている(和泉, 1978).

(烏賀陽 信央)

2. 本学体力テスト小史

1) 運営方法等に関する変遷

現在, 東京女子体育大学の体力テストは, 大学3, 4年生の体力テスト実行委員が中心となって運営され, それをサポートする形で女子体育研究所・教職員が位置している. 以下では, 体力テストの運営についての変遷を1985(昭和60)年度以降の「体力テスト結果報告書」, 1998(平成10)年度以降の「新体力テスト結果報告書」, 和泉(1966), 川口(1968), 片山(1972), 若山ら(2011)の先行研究と, 聞き取り調査を資料に用いて検討した. 聞き取り調査は, 体力テストに関わっていた教職員や実際に体力テストを行った卒業生に協力してもらった. 方法としては, 1985(昭和60)年度から現在までの体力テストの報告書と上記した先行研究をベースにして, それを裏付ける補足資料に聞き取り調査の結果を用いた.

川口(1968)によると, 本学の体力テストは1962(昭和37)年から和泉貞勇先生が中心にはじめられている. 当時から現在のように, 検者は3, 4年生, 被検者は大学1, 2年生と短期大学1, 2年生であった. ただし, 1979(昭和54)年の卒業アルバムに映っているグループ編成表には4年生も被検者として掲示されており, 1992(平成4), 1993(平成5)年度は全学生が被検者になっている. これらの理由が記された記録は残っていない. 体力テストの運営は, その後, 女子体育研究所に移っていった.

本学における体力テストの報告書の作成は, 1985(昭和60)年度からはじまり, 現在まで続いている. 最初の報告書は, 女子体育研究所が作成していることから体力テストの運営は, 教職員が行っていたと

考えられる。当時の運営についての聞き取り調査では、体力テストを実施している場所に関係する教員やデータ処理等で、特定の教員の名前は出てきたが、教職員全員で体力テストを運営していたという回答が多かった。

また、1994(平成6)年度には体力テストマニュアルが作成され、種目責任者に大学3,4年生が配置されている。この1994(平成6)年度までは、体力テストの実施日が5月中旬であったが、翌年の1995(平成7)年度から4月下旬に変更されている。さらに、1995(平成7)年度は体力テスト実行委員会が発足され、各部署に担当教員は配置されていたが、運営の主導は学生に移っている。この時の女子体育研究所の所長は、阿部征次教授であり、聞き取り調査では、この阿部先生が所長の時に、体力テストの形に様々変化があったと述べられている。

1998(平成10)年度から新体力テストがはじまり、新体力テストマニュアルが作成され、体力テスト実行委員会により、新種目の実習が行われている。この年に「自分の体力プロフィール」というものを記入している。1994(平成7)年度から体力テスト実行委員会が設けられ、体力テストの運営は、学生に移行していたが、1998(平成10)年度までは、受付、検印、気象計測で教務補佐が関わっている。つまり、体力テストの運営は学生に移行したが、その補助に教務補佐が付いていたと考えられる。

データ入力については、1986(昭和61)年度から情報工学研究室の芝茂雄教授が作成した体力測定プログラムを使用してきた。そして、2001(平成13)年度からデータ入力の仕方に新方式を取り入れていると報告書には記載があるが、その詳細についてはわかっていない。翌年の2002(平成14)年度には、データ入力にパソコンを導入して、2003(平成15)年度には、そのデータ入力の方法について、パソコン講習会を開催している。この講習会の対象については記述がなく不明である。その後、2006(平成18)年度からマークシートを導入している。この年度まで、体力テストの運営の欄に、教務補佐の名前が記されている。

2010(平成22)年度まで、各部署に約3人ずつ担当教員として割り当てられ、翌年以降の報告書には、

各部署の担当教員の記載はなくなり、検者として参加するゼミ生が記されているところに指導教員として記されているだけになっている。聞き取り調査では約10年前まで、全教員が体力テストに関わっていたが、その後は、女子体育研究所と何人かの教員しか関わらなくなったということを複数人が回答していた。この点から体力テストと教員の関りについて勘違いが起きていると考えられる。現在でも、教員はゼミ生とともに体力テストに参加することになっているが、各部署に張り付く担当教員という形ではなく、ゼミ生の指導教員という形で記載されるようになった2011(平成23)年から教員は参加しなくても良いのだと勘違いが起きたことが考えられる。なお、個人データの返却が2011(平成23)年度からはじまっている。

以上のことから、東京女子体育大学の体力テストは1962(昭和37)年から和泉貞男先生によってはじめられ、その後、運営は女子体育研究所に移っていった。1985(昭和60)年度から1994(平成6)年度までは、教職員が主体で行われていたが、1995(平成7)年度から体力テスト実行委員会が発足され、運営の主体は学生に移行された。運営が学生に移行された後も全教員は各部署に配置され、体力テストに関わっていたが、2011(平成23)年以降は、各部署の担当教員という記載ではなく、ゼミ生の指導教員という記し方が誤解を招き、体力テストで関わっている教職員は、女子体育研究所の所員と特定の教職員のみが関係するという構図に変化したと考えられる。

(及川佑介, 永井将史, 長谷川千里)

2) 測定項目の変遷

和泉(1966)によれば、本学の体力テストは1962(昭和37)年度から実施された。当初は、身長、体重、胸囲、座高、ローレル指数、全下肢長、指極、肩幅、骨盤幅、胸部横径、胸部矢状径、頸囲、腰部最小囲、骨盤囲、臀囲、屈曲上腕囲、伸展上腕囲、前腕最大囲、前腕最小囲、大腿最大囲、大腿最小囲、下腿最大囲、下腿最小囲、臀部皮厚、腹部皮厚、側腹部皮厚、掌側上腕部皮厚、背側上腕部皮厚、後大腿部皮厚、後下腿部皮厚の計30項目を体格項目として、握力(左右)、背筋力、肺活量、サイドステップ(回/20秒)、バー

ビーテスト(回/10秒),体前屈,体後屈,片足爪先立ち,垂直跳び,立ち幅跳び,走り幅跳び,ソフトボール投げ,砲丸投げ,50m走,100m走,腕立て伏臥(膝付),時間懸垂(秒),3分縄跳び,ハーバードステップテストの計20項目を運動能力項目として実施していたが,片山(1972)の報告によれば,1962(昭和37)年度から1971(昭和46)年度までの10年間に測定された項目は,名称等の変更もあるが,体格15項目,運動能力15項目であった。

1970(昭和45)年度頃からは卒業生らの聞き取り調査より,体格測定項目が身長,体重,胸囲,皮脂厚,座高の5項目,運動能力項目は15項目程度を実施していたと推察される。ただし,女子体育研究所(1982,1987)によると,1977(昭和52)年度から1984(昭和59)年度までの運動能力測定項目は反復横跳び,垂直跳び,背筋力,握力(左右),踏み台昇降運動,伏臥上体そらし,立位体前屈,50m走,走り幅跳び,ハンドボール投げ,斜め懸垂腕屈伸,1000m走の13項目を実施していたと推察されるが,1978(昭和53)年度のみ走り幅跳びの記録が記載されておらず,その年度の運動能力測定項目は12項目であったようである。

本学における体力テスト報告書は1985(昭和60)年度から存在し,それによればその当時の測定項目は全18項目であったと記録されている。形態測定項目として4項目(身長,体重,胸囲,皮脂厚),機能測定項目は全10項目(筋力・筋持久力:背筋力,握力(左右),斜め懸垂腕屈伸,瞬発力:垂直跳び,柔軟性:立位体前屈,伏臥上体そらし,敏捷性:反復横跳び,心肺機能:肺活量,踏み台昇降運動,平衡機能:片足立片足爪先立ち)であった。また,運動能力測定項目として50m走,走り幅跳び,1000m走,ハンドボール投げの4項目であった。尚,皮脂厚は腹部,上腕上部,肩甲骨下部(背部)の3箇所を計測し,体脂肪率及び総脂肪量,除脂肪体重,ローレル指数を算出したと記録されている(女子体育研究所1992)。

しかし1992(平成4)年度,形態測定で実施していた皮脂厚,心肺機能測定項目の肺活量,平衡機能測定項目の片足立片足爪先立ちの3項目は削除され,全15項目となった。さらに,1994(平成6)年度には筋力・筋持久力測定項目であった斜め懸垂腕屈伸が運動

能力測定項目として実施され,1995(平成7)年度からは児童教育学科の学生のみ形態測定項目として座高が追加された。これはスポーツ青少年局への報告サ

表3 体力測定項目(昭和37-41年度)

体格項目	運動能力項目
身長	握力(右)
体重	握力(左)
胸囲	反復横跳び
座高	垂直跳び
ローレル指数	背筋力
頸囲	踏み台昇降
腰部最小囲	伏臥上体そらし
上腕伸囲	立位体前屈
前腕最大囲	50m走
大腿最大囲	走り幅跳び
下腿最大囲	ハンドボール投げ
指極	斜め懸垂
肩幅	1000m走
骨盤幅	肺活量
腹部皮厚	片足立ち

表4 昭和60,平成11,29年度における体力テスト項目の変遷

		測定項目	S60	H11	H29
形態測定	身長		○	○独自	○
	体重		○	○独自	○
	胸囲		○		
	皮脂厚		○		
	座高			○新	
	体脂肪率				○
機能測定	筋力	背筋力	○	○独自	○
		握力	○	○新	○
		上体起こし		○新	○
	筋持久力	斜め懸垂腕屈伸	○		
	瞬発力	垂直跳び	○	○独自	○
	柔軟性	立位体前屈	○		
		伏臥上体そらし	○		
		長座体前屈		○新	○
	敏捷性	反復横跳び	○	○新	○
	心肺機能	肺活量	○		
踏み台昇降運動		○			
平衡機能	片足立片足爪先立ち	○			
持久力	20mシャトルラン		○新	○	
運動能力測定	50m走	○	○新	○	
	走り幅跳び	○			
	1000m走	○			
	ハンドボール投げ	○	○新	○	
	立ち幅跳び		○新	○	

○:実施、○独自:本学独自設定項目、○新:新体力テスト項目

ンプルとして測定され、2010(平成22)年度まで実施された。1998(平成10)年度には、形態測定項目に含まれていた胸囲、柔軟性測定項目の立位体前屈、伏臥上体そらし、心肺機能測定項目の踏み台昇降運動、走り幅跳び、1000m走は測定項目から外され、その代わり筋力測定項目として上体起こし、柔軟性項目として長座体前屈、持久力測定項目として20mシャトルラン、運動能力測定項目として立ち幅跳びが追加された。

1999(平成11)年度からは新体力テストが始まり、本学ではそれらの項目に加え、身長、体重、背筋力、垂直跳びを本学独自の測定項目として継続して測定し、また、平成29年からは体脂肪率が追加され、現在まで継続されている。

(筒井孝子)

3) 集計方法の変遷

本学の体力テストの集計の仕方の推移は以下の通りである。総じて、体力テストの集計の方法はその年により細かな点に変化が多々ある。体力テストによって測定される体格や体力および運動能力に関する指標の内容については、他章に紹介されているので、本稿ではデータ処理(集計および統計的分析)の方法のみを取り上げる。

本学の体力テストは、女子体育研究所運営委員会によって行われるものである。まず最初に指摘できることとして、体力テストの結果の集計や分析の方法については、各年度の女子体育研究所運営委員により様々な違いがみられ、平成の中盤までは一定していなかったことである。コンピュータの性能や統計分析プログラムの発展により、それぞれの時代における集計や分析方法のスタンダードが異なることも、集計・分析方法が一定でなかった背景として挙げられよう。また、1998(平成10)年度から「新体力テスト」となるなど、体力テスト自体にも時代による変化が見受けられる。

本学の体力テストは1962(昭和37)年度から行われている。片山(1972)によれば、1962(昭和37)から数年の間は測定項目の内容が一定ではなかったが、1965(昭和40)年度からは、体格15項目、運動能力15項目の計30項目による測定が行われていたことがわかっている。測定された項目は、平均値と標準偏差

を算出したり、各測定結果の分布の正規性の検定を行ったり、ノンパラメトリック検定のうちの趨向性の検定によって、1966(昭和41)年度までの5年間の推移(有意な上昇または下降があったか)を検討している。また、若山・服部・奥野・鈴木・鶴沢・八尾・東山・佐藤・高梨(2011)には、1970(昭和45)年度～2010(平成22)年度までのデータを用いて、体力・体格の推移を検討したり、19歳の全国平均との比較を行ったりしており、本学において体力テストが毎年継続的に行われ、データと集計・分析の知見が蓄積されていることがわかる。また、若山・八尾・東山・烏賀陽・小野田・佐藤・佐々木(2013)でも、2003(平成15)年度～2012(平成24)年度について、運動部に所属する大学2年生のデータを用いて、女子競技スポーツ選手を対象とした評価基準の作成や、競技別体力特性を明らかにする研究が行われており、体力テストの結果が本学学生、ひいては女性アスリートの育成に生かされていることがわかる。

さて、本学女子体育研究所には歴代の体力テストの結果報告書が保存されている。その最も古いものは1985(昭和60)年度のものであるため、それらの報告書に基づいて集計・データ分析方法をまとめた。

1985(昭和60)年度～1986(昭和61)年度には、大学体育学部、短期大学保健体育学科・児童教育学科のそれぞれに関して、学年別に参加人数、身長・体重等の体格に関する各指標(以下、体格指標とする)、および体力テストの結果に関する各指標(以下、体力指標とする)について、平均値、標準偏差、最大値、最小値、度数分布を算出した。また、平均値と標準偏差を用いてTスコア(いわゆる偏差値で、各自の得点と平均値との差を標準偏差で割って標準化し、これに10を掛けて50を足したものを)算出している。各指標の度数分布はヒストグラムとして報告されている。Tスコアからレーダーチャートを作成し、学生の個人プロフィールが作成された。さらに、学生一人一人の結果に関する個人データが報告書に掲載されている。なお、女子体育研究所(1982)、女子体育研究所(1987)、によれば、1985(昭和60)年度以前についても、1977(昭和52)年度～1986(昭和61)年に関しては、各測定種目について、学年別に参加人数、平均値、標準偏差、

最大値、最小値を算出していたことがわかっていて、

1987(昭和62)年度～1988(昭和63)年度も同様の集計がなされているが、学部・学科ごとの平均値の差の検定が行われるようになった。また、結果をクラブ別に集計することも行われた。さらに、本学の体力テストの結果から、当年分も含めた過去20年間の体力の推移をグラフ化した。

1989(平成元)年度～1991(平成3)年度も同様の集計がなされているが、この年からは、学年別の集計にかわり18歳、19歳という年齢別の集計が行われるようになった。年次推移の分析範囲は1969(昭和44)年度から当年分となった。1992(平成4)年度も、平成3年度と同様の集計を行っているが、個人プロフィールに関する記述がなくなっている。

1993(平成5)年度～1997(平成9)年度は、学部・学年別に参加人数、身長・体重等の体格に関する各指標(以下、体格指標とする)、および体力テストの結果に関する各指標(以下、体力指標とする)について、平均値、標準偏差、最大値、最小値、度数分布を算出した。このほかの部分について、年度による様々な違いがみられた。

1993(平成5)年度は、年齢ごとの集計ではなく、再び学年ごとの集計とされている。また、平均値と標準偏差を用いてTスコアを算出している。各指標の度数分布は、学部学科ごとにヒストグラムとして報告されている。プロフィールはクラブごとに作成されるようになった。学生の個人データは、大学・保体はクラブごとに配列され、見教は学籍番号順に掲載された。

1994(平成6)年度には、最大値、最小値の記載がなくなった。クラブ別の平均値を算出し、平均値の比較を行った。また、大学・保体に関してはクラブ別にプロフィールを作成し、見教については学年別に体力プロフィールが作成された。さらに、「自分の体力プロフィールを作ろう」という記事が掲載された。大学・保体の個人データも掲載された。

1995(平成7)年度には、見教1、2年に対してアンケートが行われるようになり、このアンケートの各質問項目に関する平均値と標準偏差も算出されるようになった。1996(平成8)年度も同様の測定と集計であった。

1997(平成9)年度には、見教アンケートの回答結果に基づいた、項目別体力プロフィールが作成された。

1998(平成10)年度には、体力テストが「新体力テスト」となった。1998(平成10)年度から現在に至るまで、基本的に例年、各体格指標・各体力指標に関して学部・学年別に参加人数、平均値・標準偏差、Tスコアを算出し、平均値の差の検定を行っている。またクラブ別に平均値と標準偏差を算出し、平均値の比較を行うとともに、クラブ別体力プロフィールを作成している。1998(平成10)年度は、新体力テストとなって測定内容に変化があったが、こと集計方法に関しては1997(平成9)年度と大きく変わることはなかったといえる。

1999(平成11)年度～2005(平成17)年度には、各体格指標・各体力指標に関して、学部・学年別に参加人数、平均値・標準偏差、Tスコアを算出し、平均値の差の検定を行っている。また、その結果と18歳、19歳の全国平均のデータとの比較も行っている。さらにクラブ別に平均値と標準偏差を算出し、平均値の比較を行うとともに、クラブ別体力プロフィールを作成している。見教については学年ごとに、アンケートの回答別に各測定指標の平均値・標準偏差の算出およびプロフィールの作成を行っている。また、各学生の個人データが掲載された。

2001(平成13)年度からは、各学生の個人データの掲載はなくなった。また、体格指標・体力指標に関して、各指標の相互の相関係数のマトリックスが掲載されるようになった。

2002(平成14)年度も基本的には同様の集計であるが、この年度からは、クラブ別集計において学内クラブ・学外クラブごとの集計が導入された。

2005(平成17)年度も、測定内容は同様であるが、クラブ別集計において学内・学内という区分がなくなった。また、変動係数が算出されるようになった。変動係数は、各指標の絶対値の大きさによる影響を避けるため、標準偏差を平均値で割って算出される値であり、標準偏差と同様に、データの散らばり具合を表わす指標である。また、見教のアンケート結果は、回答のヒストグラムのみが掲載されている。

2006(平成18)年度からは、見教アンケートがなく

なった。また、学科・学年別の体格・体力の年次変化（増加率）のグラフが掲載されるようになった。

2007（平成19）年度からは、成績優秀者の掲載が始まった。2008（平成20）年度は一部種目のみ上位者の氏名が公表されており、学科別Best3、Best5、学内ランク、種目別Best5&アベレージが公表されている。成績上位者は、大学1年、2年は各5名、保体・児教は各学年3名ずつ公表された。匿名であるが学年・部活名は記されている。順位は、各種目のTスコアの平均値を算出し、この値の大きい順となっている。

2009（平成21）年度～2017（平成29）年度は、各体格指標・各体力指標に関して、学科・学年別集計（大学1年、2年、保体1年、2年、児教1年、2年）およびクラブ別の集計がなされた。またクラブ別の体力・体格プロフィールが掲載された。さらに、学科別、体格・体力の年次変化、および体格・体格データの変動係数、相関マトリックス、総合成績上位者（個人の順位）が掲載された。成績上位者は、大学体育学部は上位10名、保体5名、児教5名、3年生以上クラブ所属学生5名が公表された。

2009（平成21）年度には、成績上位者の氏名が公表されている。種目別のランキングはなくなった。成績上位者の身長・体重は伏せられている。

2010（平成22）年度には、上位者の身長・体重も公表されている。この年からは、体力テストの参加者にクラブ所属の3・4年生が加わった。3年生以上クラブ所属学生も、成績上位者5名が発表されている。

2011（平成23）年度からは、上位者の身長は公表されているが、体重は伏せられている。

2014（平成26）年度からは、上位者の身長は掲載されていない。

2015（平成27）年度からは、大学体育学部の上位者は15名発表されることとなった。

2016（平成28）年度からは、短大保体、児教は各3名ずつ発表されることとなり、現在に至っている。

（大石千歳）

4) 学生の感想

体力テスト結果報告書には、「学生の感想」が掲載されている。それは、体力テスト結果報告書が作成

された1985（昭和60）年度には掲載がなく、1994（平成6）年度から現在に至るまで「学生の感想」が載せられている。その掲載する際のタイトルは表5のように微妙に異なり、内容に変化がみられる。

表5 体力テスト結果報告書における「学生の感想」欄のタイトル変化

年度	タイトルの変化
1994(平成6)年度	「種目責任検者の感想」 「被検者の感想」
1995(平成7)年度	「種目責任検者の感想」
1996(平成8)年度	「体力テストを終えて一 検者と被検者の感想」
1997(平成9)年度	「体力テストを終えて一 被検者と検者の感想」
1998(平成10)年度	「測定を体験して」
1999, 2000(平成11, 12)年度 合併号	「新体力テストー感想ー」
2001(平成13)～ 2017(平成29)年度(現在)	「反省と感想」

（「平成6年度体力テスト結果報告書」から「平成29年度新体力テスト結果報告書」より作成）

1994（平成6）年度の体力テスト結果報告書から「学生の感想」が掲載された経緯は不明であるが、次の理由から女子体育研究所の所長の変化と関係しているように思える。「学生の感想」が掲載された1994（平成6）年度は、阿部征次先生が所長になって2年目、そして、森田昭子先生が所長になった2001（平成13）年度から「反省と感想」というように、「反省」という言葉がタイトルに加わり、それが現在まで続いている。さらに、同年から体力テスト実行委員長と副委員長のコメントの掲載がはじまっている。この阿部征次先生と森田昭子先生は、聞き取り調査で「体力テストに詳しい人物」、「献身的に体力テストに関わっていた人物」と述べられ、さらに、阿部征次先生が所長の時に体力テストの行い方が様々変わったといわれている。

また、「学生の感想」の文量は、1994（平成6）年度から1998（平成10）年度までがかなり多くて詳しく書かれているが、その文量は平成11年度から約半分以下になり、それが現在まで続いている。その経緯も不明である。「学生の感想」で記されている内容は様々で

あるが、各部署ごとに、運営上の進行や機器等による不具合、今後の課題などが記されていた。

聞き取り調査の時に多くの人が述べていたことで、被検者はみんなやる気があり、積極的に行っていたこと、全教員が体力テストを手伝っていたこと、がある。この両者は、体力テスト結果報告書で学生による感想が掲載されはじめた時期にも重なる。従って、以下では被検者の様子(やる気)と教員の関りについて明らかにする。ただし、「学生の感想」は、1994(平成6)年度から1998(平成10)年度まで分量があり、その後、簡易に書かれているため、主に1994(平成6)年度から1998(平成10)年度の5年間を取り上げることにする。

被検者の様子(やる気)については、垂直とびで「いい加減な人は少なく、一生懸命やっている人が多かったの、素晴らしい記録が続出した。」(1995)、反復横とび「全員が真剣に取り組んでいたのが印象的だった。」(1995)というように懸命に取り組む様子が記されていたが、一方で、『「成績には関係ないんだから、そんな一生懸命に……」とまさに“やらされている”ってことを主張するような言葉を何人もの人から聞きました。」(1994)、走り幅とび「被検者ですが、やる気のない学生が多く、練習でゆっくり走り本番も同じように踏み切るので、記録が1m台ものもありました。」(1995)、走り幅とび「(被検者の)本当の力はもっと上だと思えます。検者側からすると、もう少しやる気を出して行ってもらえるとやりやすかったです。」(1996)、『「体力テスト」それは児童教育学科の学生にとっては、とても嫌な存在だと思います。『自己の体力を知り、学生計画や生活設定を立てる等に役立てる』という目的があっても実際に役立てようと思っているかも問題です。」(1995)、シャトルラン「児童教育学科の学生は特にですが、『疲れるから途中でやめた』とか『汗かきたくないから3往復くらいにしておく』という声だけでなく、実際にそういう学生が少なくありませんでした。」(1998)と記されていて、聞き取り調査で述べられていたこととは異なり、懸命に行っている者もいれば、そうでない者もいたことがわかった。

次に、体力テストへの教員の関りについては、「先生からアドバイスをもらったら作業がスムーズにいった。」(1994)、「指導して頂いた先生方、ありがとうございます

いました。」(1994)、救護係「怪我人が出た時に、処置が素早くできずに戸惑ってしまったが周りに先生方がいらっしやったので指示していただきスムーズにできましたが、学生でできればよかったと思いました。」(1995)、「体力テストにご指導していただいた先生方に感謝したいと思います。」(2001)というように記されていて、教員が関わっていたことがわかる。ただし、次のように記している学生がいた。それは、「受付では、ゼミ生・教務補佐の先生方の御協力ですmoothに出来たと思います。」(1995)と記した後、同じ人物が「陰ながら御指導を頂いた先生方」(1995)と表現しているのである。このことは、教員の運営に関することで取り上げたことと一致していて、教務補佐が学生とともに運営に関わり、それを教員はサポートしている様子が窺い知れる。

このように、教員が学生をサポートするように関わっていたことは明らかになったが、全教員の動きまでは、「学生の感想」からはわからなかった。しかし、「学生の感想」に掲載されていることで、特定の教員の名前が次のように掲載されていた。反復横とび「森田先生が教えてくださったように……」(1996)、シャトルラン「中本先生の手もお借りする形になってしまった。」(1998)、「中本先生、若山先生を初めとする先生方、……(中略)……ありがとうございました。」(2008)、である。森田昭子先生、中本哲先生、若山章信先生は、聞き取り調査で体力テストに詳しい方、積極的に関わっていた方として挙がっている先生であることに一致している。

以上のことから、体力テスト結果報告書に「学生の感想」は、1994(平成6)年度から掲載されるようになり、はじめの5年間は分量が多く記されていた。その後、分量は減ったが現在まで続いている。その分量のことや内容の変化は、女子体育研究所の所長と関係しているように思われる。そして、被検者の様子(やる気)は、聞き取り調査の結果とは異なり、懸命に行っている者とそうでない者が混在していたことがわかった。最後に、体力テストへの教員の関りについては、「学生の感想」からは詳しくわからなかったが、教員がサポート的に関わっていたこと、さらに、特定の教員が積極的に関係していたことが明らかになった。

(及川佑介)

5) 卒業生や教員の考え(聞き取り調査から)

聞き取り調査の方法は研究方法の項に示した。聞き取り調査結果は各項で適宜用いたが、ここでは、各項での引用と重なる部分もあるが、調査結果の概要を述べる。また、聞き取り調査結果を残して置くべきとの考えから、さらに、聞き取り調査要旨の抜粋を巻末付録にも掲載する。

今回の聞き取り対象者のうち、吉祥寺時代に短大で学んだ経験を持つ卒業生は1人であった。

①体力テスト開始と和泉先生について

1961(昭和36)年入学のA1は「吉祥寺では体力テストはなかった。国立に来てから和泉先生が着任し、それから体力テストが始まった、和泉ゼミで体力テストの当日の順番などを決めていた」と語った。

その後も和泉先生が担当していたことを、1972(昭和47)年入学のA7は「和泉先生が中心となっていた」と語った。

1975(昭和50)年着任のB1は「和泉先生は1962(昭和37)年の大学開設時に着任された測定評価を専門とする先生で、『女子の身体的理想像』の研究をしていた。着任前は東大の先生だった。東大は今でもそうだが、体力テストを実施し、結果の分析、体力やトレーニング研究が進んでいるので、本学でもすぐに実施できたのだと思う。助手時代(1975年度から1978年度)に和泉先生の授業を何回か手伝ったことがある。私が女性なので、男性の和泉先生では困ることがあるので頼まれていたのだと思う。何年度かは思い出せない。授業のなかで胸囲を測るなど、身体測定を手伝った。学生は授業の中で身体測定のことを学んでいた。また、集計も手伝ったことがあるが、パソコンはない時代で、電卓を使って平均と標準偏差を出していた」と語っている。

和泉先生が着任してから体力テストが始まり、和泉先生を中心として運営されていたことは確認できたが、運営がいつから女子体育研究所に移ったかについては、確認できなかった。

②被検者について

被検者については1,2年生だったという回答が多

いが、1965(昭和40)年入学のA3は「体力テストは学校行事として1年生の時から実施されていた。1年生から4年生まで受けていたと思う。先生方が運営して測っていました。5月ぐらいか、部活の人がお手伝いしていたと思う」と語った。

本学附属図書館に保存してある卒業アルバムのうち、最初に体力テスト風景が掲載されていたのは1979(昭和54)年のもので、グループ編成と測定順序の掲示の写真が掲載されている。測定日は10月26日(金)で、大学4年生も被検者になっている。また、1992(平成4)年と1993(平成5)年も1年生から4年生まで測定しているように、全学生が被検者となっていた年もあるが、全部を明らかにできなかった。

③検者について

1961(昭和36)年入学のA1は「卒業してすぐ教員になり、体力テストでは先生が測っていた。卒業して2年目に学生数が増えた。それから1,2年生だけ測るようになったのかもしれない」と語った。

1965(昭和40)年入学のA3は「先生方が運営して測っていました。5月ぐらいか、部活の人がお手伝いしていたと思う」と語った。

検者は当初は先生で、次第に3,4年生が測るということに変化している。

④先生の関わりについて

1966(昭和41)年入学のA4は「大学卒業とともに、助手になった。教員は全員、体力テストの手伝いをし、教室での測定も手伝った。教員は専門でなくても、皆が協力して体力テストを行った。現在のように、学生が体力テストの運営していたのではなく、教員が運営していた。20年くらい前までは、体力テスト、実習など、教員皆がともに行っていたが、なぜかそのあたりから、実技、理論のように、分かれていったように思える。教員皆が一緒に行っていた時代が懐かしく、そうあるべきだと思っている」と語った。

1972(昭和47)年入学のA8は「各種目を終えた証明となる印鑑は教員の名前のものであったと記憶している。教員時代になってからも以前は女子体育研究所運営委員でなくても、教員全体が測定箇所割り



図1 1979(昭和54)年度卒業アルバム(卒業アルバム初の「体力測定」掲載)

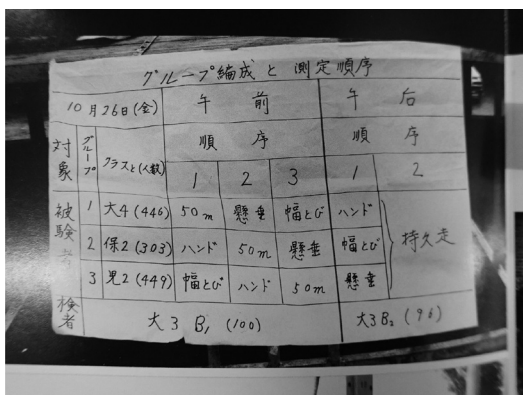


図2 図1を部分拡大したものの「グループ編成と測定順序」

当てられ、見回りを行っていた」と語った。
 1975(昭和50)年着任のB1は「教員の関わり方が最も変化した。私が着任したときはすでに、教員が測

定していなかったが、教員の誰かは必ず一日中測定場所において、学生を指導し記録用紙に教員が印鑑を押していた。学生実行委員会が運営するということに理由に、教員が次第に関わらなくなり、顔を見せる程度になっていった。今では、学校行事であるのに、同時に教職員健康診断が行われ、いくつかの各種委員会まで開かれ、女子体育研究所運営委員以外の教員はほとんど関わらなくなった。顔さえも見せにこない教員がいる」などと、教員が関わらなくなったことを嘆いている。

- ⑤体力テストに対する考えについて
 1983(昭和58)年入学のA9は「クラブ毎の結果の集計だけでなく、情報やノウハウの共有ができることより良いと思う」と語った。
 1967(昭和42)年入学のA5は「体育大学として体

力テストは必須で、絶対に行ったほうがよいと思う。各種目について知ることもなるし、自分の能力で足りないもの、体内能力もわかる。これから教育者となったとき、どのような種目を専門にしているとどのような体力が足りないのか、バランスよく力をつけるために何をしたら良いか、わかるようになるので、是非指導に生かすためにもしたほうがよい。また、学生の頃と年をとってからの比較もできる。結果を年毎に出せば、ある程度の波があり、その変遷が見られるので学生の体力や日本人の体力などを見る上でも統計学的解析は必要だと思ふ被検者として1年から4年全員実施がよいと思う。2日にわたってでも、したほうがよいと思う。理由は、体力テストに取り組む姿に対し、認め合う、励まし合うことができ、上級生と下級生との一体感が味わえると思う」と語る。

1985(昭和60)年入学のA10は「40歳を過ぎて、健康運動指導士の資格取得の際に体力テストを受験する機会があり、最後の機会だと思ひ全力で取り組んだ。大学時代に全力でできていたかは疑問があるので、学生たちには、全力で取り組むことを伝えていきたい。実行委員の学生が本当によくやっている。

体力テストのデータがきちんと残っていることについて、教員になって改めてすごいことだと感じている。クラブ毎の結果をみると、特徴は変わっていないことがはっきりとわかる。この結果が『彼女たちの最高なのか』と思うので、全力で取り組んだ結果を見てみたい。(中略)コーディネーション能力が測れる方法があれば計測してみたい。競技力が高い学生はコーディネーショントレーニングもすぐにできるが、今の学生は時間がかかる。授業では縄跳びができない、ラジオ体操で手足が同時に動かないような学生もいるので、そのような測定ができれば良い」と語っている。

1989(平成元)年入学のA11は「私が学生のときは、運動か学力のどちらかがすごい学生が多かった。しかし、今は運動能力が低い学生が結構いるように思う。この学生たちは体力テストの結果も悪いのではないかと、洞察力や判断力も低いのではないかと。身体能力の高い学生はこれらの能力も高かったように思う。体育大学なら、できれば1年から4年まで測定したほうがよいと思う。体力も落ち、行動力も落ち、自己の

体力と競技力への意識レベルが低いと、体力テストをやらなければならないからやっている感じがする。以前はもっと周囲に目を向け、自身の体力と競技力について考え、しっかりと意識を持って体力テストに臨んでいたように思う」と語る。

以上のように、体力テストに対して全員が肯定的に捉えている。

⑥学生実行委員会が主導することについて

1997(平成9)年入学のA12は「平成27年女子体育研究所運営委員として、体力テストの責任者を担ったが、表向きは学生主体で体力テストは行われているものの、教員の指導なくしてはスムーズな運営ができない。また、学生同士の引継ぎが重要だと考える。体力テストの意義や目的について、4月のオリエンテーションで実行委員学生から説明されているが、もっと意義や目的、結果の活かし方など、学ぶ機会があればと思う」と語る。

2011(平成23)年度から2014(平成26)年度運営委員、2011、2012年度体力テスト責任者のC5は「一年目の初期のころ、前任教員の言う『学生主体の運営』を鵜呑みにしておりました。そのまま会議に臨んだ結果、学生委員長が会議で説明する内容は、断片的、部分的な作業内容の伝達に終始しており、運営のあり方をみな共有するものではありませんでした。ある面しようがないとは思いますが、こちらも適切なサポートが必要だと感じました。そこで2年目は、学生実行委員長、副委員長に対して、「委員長・副委員長は全体に指示を出す立場であること」「他の運営委員には気持ちよく仕事をしてもらうこと」の理解を促す働きかけをおこないました。具体的には、各作業が運営上どのような意味があるのか、なぜ必要なのかを、ともに確認しながら進めました。運営委員会会議前に、学生実行委員長が会議のために作成した資料(次第)をともに確認する、用具の確認の必要があれば一緒に女子研に行ってみる、など、折にふれて、仕事を前に進めてくれることへの感謝を伝えました。『それなりに重たい荷物を一緒に運ぶ』、という心構えで臨んでいたようです。2年目は、委員長たちに『おつかれさま。ありがとう。本当に助かった』と言うことができました」と語る。

また、C5は学生実行委員長の選任方法について、「実行委員長を選任する際には、前年度の副委員長2名のいずれかが選ばれるという慣例がありました（今も、でしょうか?）。私は担当した一年目、2名のうち、指導するクラブに所属する学生を指名しました（人柄も知っているし、連絡が取りやすいからという理由）。しかし、前年度に運営で汗をかいていたのはもう一人の学生であり、選任した委員長は流れを把握していませんでした。選ばれなかった学生からは、「この選任について少なからず違和感があった」と後から聞きました。運営のエンジンとなる彼女たちが納得して、意欲的に取り組めるような選任のあり方が必要と実感しました。そのためには、前年度の担当者をはじめとする教員側が、学生委員長、副委員長とコミュニケーションをとること、人柄等も含めてよく把握しておくこと、そしてそれを翌年の担当者に伝達することが重要と思いました」と語る。

学生実行委員会が主導して体力テストを実施する形に対しては、女子体育研究所運営委員で体力テスト責任者を担った教員から指導が必要なが語られている。

このように、学生主導であっても、学生だけに任せているのではなく、女子体育研究所体力テスト担当の教員の指導の下に行われている。

⑦元・現女子体育研究所所長が今後に望むこと

元・現女子体育研究所所長も所長時代に改革・改善したことや今後望むことを語っているが、今後に望むこととして、2009（平成21）年度から2014（平成26）年度女子体育研究所所長の任にあったC3は「50m走のフライング判定や20mシャトルランテストの回数判定、あるいは、上体起こしでの背中（肩甲骨）の付き具合の判定がかなり甘い。これまで、本学の縦断的データやクラブ別平均値を研究所報に示してきたが、元データに信頼性がなければ価値はない。より厳密にテストを実施されたい」と語る。

2015（平成27）年度から2018（平成30）年度女子体育研究所所長のC4は女子体育研究所として結果の分析システムを構築すること、測定結果の信頼性を高めること、以前のように教員も指導に参加してほし

いこと、1、2年生だけでなく、学生全員を測定することなどを挙げる。

（掛水 通子）

まとめと今後の課題

近代日本の体力テストは、G. A. Lelandによって1878（明治11）年に体操伝習所で導入された活力検査が始まりとされ、1897（明治30）年には学生生徒身体検査規定が定められた。以後、改正され、陸軍戸山学校下士官兵ノ運動能力標準と日本体操連盟の体力検査が1939（昭和14）年の体力章検定制度へと連なる。諸外国でも同様の制度があった。

戦後、文部省は1949（昭和24）年「運動能力検査」を実施、同年日本体育協会がスポーツ・バッジ・テストを制定し、他の団体でも研究されていく。新制大学で一般体育が必修となり、体力検査の実施と結果に基づく体育運動の実施が求められ、大学で体力テストも実施されるようになる。なかでも、法政大学では1952（昭和27）年から実施していた。文部省の体力・運動能力調査は1964（昭和39）年に開始された。

こうした日本の状況のなかで、本学における体力テストは、それまでの短大に加えて大学が新しく設置された1962（昭和37）年から始まった。これは、1964（昭和39）年度から実施の文部省（現文部科学省）の体力・運動能力調査に先んじており、本年度で57回の歴史を持つ。今では、体力テストは、本学唯一の全学生が参加する学校行事となっている。

本学体力テストを開始し、その基礎を築いたのは、大学設置の年に本学に着任した体育測定統計を専門とする和泉貞夫であった。和泉の前任校東京大学での研究を基に本学で実施したのではないかと推察される。

当初は和泉貞夫と助手川口道子、和泉ゼミ生を中心に運営されていたが、いつしか女子体育研究所の運営に移った。1994（平成6）年度までは、教職員主導で5月中旬に行われていたが、1995（平成7）年度から学生を実行委員長とする、体力テスト実行委員会が発足した。運営の主導は学生に、日程は4月中旬に移され、同日に教職員の健康診断が実施されるよ

うになった。

運営の主導が学生に移行された後も全教員は各部署に配置され、体力テストに関わっていたが、2011(平成23)年度以降は、各部署の担当教員という記載ではなく、ゼミ生の指導教員という記し方が誤解を招き、教職員健康診断に加えて各種委員会が同時に開催されるようになり、教員が会場で指導しなくなった。本学唯一の全学挙げての体力テストと言っても、女子体育研究所運営委員と特定の教職員のみが関係するという構図に変化した。

1962(昭和37)年には体格30項目、運動能力20項目合計50項目が測定されていた。その後、項目は減少していき、文部省の体力テスト項目に本学独自の項目を加えたもの、次いで新体力テスト項目に本学独自の項目を加えたものになり、現在では新体力テスト8項目に本学独自の5項目(身長・体重・体脂肪率・背筋力・垂直跳び)を加えた13項目を実施している。

体力テストの結果の集計や分析の方法は、コンピュータの性能や統計分析プログラムの発展の影響もあり、細かな変更が多々あり一定していなかった。各体格指標・各体力指標に関して、学科・学年別集計およびクラブ別の集計がなされた。またクラブ別の体力・体格プロフィール。さらに、学科別、体格・体力の年次変化、および体格・体格データの変動係数と相関マトリックス、総合成績上位者(個人の順位)が公表された。成績上位者は、2016(平成28)年度からは、大学体育学部は上位15名、保体3名、児教3名、3年生以上クラブ所属学生5名が公表されている。

学生の感想から、被検者の様子(やる気)は聞き取り調査の結果とは異なり、懸命に行っている者とそうでない者が混在していたことがわかった。体力テストへの教員の関りについては、教員がサポート的に関わっていたこと、さらに、特定の教員が積極的に関係していたことが明らかになった。

聞き取り調査の結果、これまでの体力テストの歴史を知る教員は体力テストの会場へ出向き指導し、従来のように、教員も参加して欲しいと願っている。

今後の体力テストに望むこととして、女子体育研究所として結果の分析システムを構築すること、測定結果の信頼性を高めること、以前のように教員も指導に

参加してほしいこと、1,2年生だけでなく、学生全員を測定することなどが挙げられる。

成績上位者表彰式は2011(平成23)年度から行われている。2017(平成29)年度からは「藤村トヨの教育」の授業1コマ90分を使用し、女子体育研究所が2016(平成28)年度に作成した『TWCPEウィメンアスリートのためのスポーツ指導・健康手帳 スポーツダイアリー』の指導と併せて実施し、自己の健康、体力を総合的に自己評価させるようにしている。さらに、教員から体力テスト結果の見方などの講義をして、体力テストの意義を理解させるようにしている。

これまででもそうであったように、運営方法、測定項目、結果の集計方法や内容は、常に科学の発展や時代の変化に応じて改善されながら継続される必要があると思われる。また、体力テスト関係資料が保存されなければならない。

本研究において、本学体力テスト全史が明らかにされた訳ではないので「本学体力テスト小史」と題した。本研究では、明らかにできなかったことが多く残された。全期間の検者、被検者、日程、運営が体育測定研究室から女子体育研究所に移された年の特定、研究当初から節目の年の研究員に委ねていた様々な視点からの体力テスト結果の分析等を今後の課題としたい。

(掛水 通子)

文献

- 青山昌二(1978)東大方式について。体育・スポーツ・レクリエーション, 5(1):6-7.
- 藤村学園創立百周年記念記録等作成実行委員会編(2002)藤村学園100年のあゆみ。学校法人藤村学園:国立.
- 藤村学園創立百十周年記念記録等作成実行委員会編(2012)藤村学園創立110周年記念東京女子体育大学・東京女子体育短期大学この10年のあゆみ2002-2012。学校法人藤村学園:国立.
- 波多野義郎(1995)諸外国の体力テストと日本の体力テスト。Japanese journal of sports sciences, 14(2):193-202.
- 波多野義郎(2013)新体力テストと諸外国の体力テス

- トを比べてみると. 体育科教育, 61(4):13-21.
- 平野稔(1978) 体力テストの在り方をさぐる(1). 体育・スポーツ・レクリエーション, 5(1):17-18.
- 今村嘉雄・宮畑虎彦編(1976) 新修体育大辞典. 不昧堂出版:東京, pp. 440, 780-781, 950.
- 井上修梧(1978) 体力テストの実施と活用について(2). 体育・スポーツ・レクリエーション, 5(1):13-14.
- 石田俊丸(1983) 大学生の体力テスト実施の現状とこれからの課題. 日本体育学会大会号, 34(0):47.
- 石河利寛(1973) 国際体力テスト標準化委員会の歩み(世界の体育と体育研究(特集)). 体育の科学, 23(11):701-704.
- 和泉貞男(1966) 女子体育専攻学生の体格と運動能力について. 東京女子体育大学紀要, 1:19-29.
- 和泉貞男(1978) 本学における体力テストについて. 体育・スポーツ・レクリエーション, 5(1):12-13.
- 女子体育研究所(1982) 本学学生の体力テスト結果-IV-昭和52年度~昭和56年度. 東京女子体育大学紀要, 17:183-188.
- 女子体育研究所(1983) 本学学生の体格と運動能力測定結果. 東京女子体育大学紀要, 18:113-117.
- 女子体育研究所編(1986) 体力テスト結果報告書 昭和60年度. 東京女子体育大学女子体育研究所:国立.
- 女子体育研究所編(1987) 体力テスト結果報告書 昭和61年度. 東京女子体育大学女子体育研究所:国立.
- 女子体育研究所(1987) 本学学生の体力テスト結果-V-昭和57年度~昭和61年度. 東京女子体育大学紀要, 22:99-106.
- 女子体育研究所編(1988) 体力テスト結果報告書 昭和62年度. 東京女子体育大学女子体育研究所:国立.
- 女子体育研究所編(1988) 体力テスト結果報告書 昭和63年度. 東京女子体育大学女子体育研究所:国立.
- 女子体育研究所編(1990) 体力テスト結果報告書 平成元年度. 東京女子体育大学女子体育研究所:国立.
- 女子体育研究所編(1991) 体力テスト結果報告書 平成2年度. 東京女子体育大学女子体育研究所:国立.
- 女子体育研究所編(1992) 体力テスト結果報告書 平成3年度. 東京女子体育大学女子体育研究所:国立.
- 女子体育研究所(1992) 本学学生の体力テスト結果-VI-昭和62年度~平成3年度. 東京女子体育大学紀要, 27:52-61.
- 女子体育研究所編(1993) 体力テスト結果報告書 平成4年度. 東京女子体育大学女子体育研究所:国立.
- 女子体育研究所編(1993) 体力テスト結果報告書 平成5年度. 東京女子体育大学女子体育研究所:国立.
- 女子体育研究所編(1994) 体力テスト結果報告書 平成6年度. 東京女子体育大学女子体育研究所:国立.
- 女子体育研究所編(1995) 体力テスト結果報告書 平成7年度. 東京女子体育大学女子体育研究所:国立.
- 女子体育研究所編(1996) 体力テスト結果報告書 平成8年度. 東京女子体育大学女子体育研究所:国立.
- 女子体育研究所編(1997) 体力テスト結果報告書 平成9年度. 東京女子体育大学女子体育研究所:国立.
- 女子体育研究所編(1998) 新体力テスト結果報告書 平成10年度. 東京女子体育大学女子体育研究所:国立.
- 女子体育研究所編(2000) 新体力テスト結果報告書 平成11年平成12年合併版. 東京女子体育大学女子体育研究所:国立.
- 女子体育研究所編(2001) 新体力テスト結果報告書 平成13年度版. 東京女子体育大学女子体育研究所:国立.
- 女子体育研究所編(2002) 新体力テスト結果報告書 平成14年度版. 東京女子体育大学女子体育研究所:国立.
- 女子体育研究所編(2003) 新体力テスト結果報告書

- 平成15年度版. 東京女子体育大学女子体育研究所: 国立.
- 女子体育研究所編(2004) 新体力テスト結果報告書 平成16年度版. 東京女子体育大学女子体育研究所: 国立.
- 女子体育研究所編(2005) 新体力テスト結果報告書 平成17年度版. 東京女子体育大学女子体育研究所: 国立.
- 女子体育研究所編(2006) 平成18年度新体力テスト結果報告書. 東京女子体育大学女子体育研究所: 国立.
- 女子体育研究所編(2007) 新体力テスト結果報告書 平成19年度版. 東京女子体育大学女子体育研究所: 国立.
- 女子体育研究所編(2008) 新体力テスト結果報告書 平成20年度版. 東京女子体育大学女子体育研究所: 国立.
- 女子体育研究所編(2009) 新体力テスト結果報告書 平成21年度版. 東京女子体育大学女子体育研究所: 国立.
- 女子体育研究所編(2010) 新体力テスト結果報告書 平成22年度版. 東京女子体育大学女子体育研究所: 国立.
- 女子体育研究所編(2011) 新体力テスト結果報告書 平成23年度版. 東京女子体育大学女子体育研究所: 国立.
- 女子体育研究所編(2012) 新体力テスト結果報告書 平成24年度版. 東京女子体育大学女子体育研究所: 国立.
- 女子体育研究所編(2013) 新体力テスト結果報告書 平成25年度版. 東京女子体育大学女子体育研究所: 国立.
- 女子体育研究所編(2014) 新体力テスト結果報告書 平成26年度版. 東京女子体育大学女子体育研究所: 国立.
- 女子体育研究所編(2015) 新体力テスト結果報告書 平成27年度版. 東京女子体育大学女子体育研究所: 国立.
- 女子体育研究所編(2017) 新体力テスト結果報告書 平成28年度版. 東京女子体育大学女子体育研究所: 国立.
- 女子体育研究所編(2017) 新体力テスト結果報告書 平成29年度版. 東京女子体育大学女子体育研究所: 国立.
- 片山道子(1972) 本学における測定実施報告(その2) 体格と運動能力. 東京女子体育大学紀要, 7: 24-36.
- 加賀谷熙彦(1995) 学校教育と体力テスト. *Japanese journal of sports sciences*, 14(2): 187-191.
- 鎌田章(1978) 体育実技履修の条件として. *体育・スポーツ・レクリエーション*, 5(1): 15-16.
- 川口道子(1968) 本学における測定実施報告: 体格と運動能力. 東京女子体育大学紀要, 3: 21-29.
- 木下秀明(1995) 体力テストの系譜と体力章検定. *Japanese journal of sports sciences*, 14(2): 203-209.
- 桐生武夫(1978) 東京工業大学における体力測定について. *体育・スポーツ・レクリエーション*, 5(1): 7-8.
- 北沢清(1976) 体力章検定とその前後(体育の昭和50年-10-). *体育の科学*: 26(3): 197-201.
- 松井秀治(1995) 国民体力法とその関連法規. *Japanese journal of sports sciences*, 14(2): 211-218.
- 松井秀治・田村真一(1995) 日本における関連文献からみた体力テストの系譜. *Japanese journal of sports sciences*, 14(2): 219-223.
- 飯塚鉄雄(1964) “体力テストの国際的標準化”について(シンポジウム) 一特集・国際スポーツ科学会議シンポジウム. *体育の科学*, 14(12): 688-691.
- 三浦睦夫(1978) 体力テストの問題点について. *体育・スポーツ・レクリエーション*, 5(1): 18-19.
- 宮下充正(1995) 体力を問う5-体力テストの変遷. *体育の科学*, 45(10): 749-801.
- 水野真佐夫(1997) ヨーロッパ諸国での体力テスト. *体育の科学*, 47(11): 869-873.
- 文部科学省(2008a) テスト項目の比較表. スポーツ庁ホームページ, 刊行物, 統計情報, 体育・運動能力調査, 結果の概要, 「平成20年度体力・運動能力調

- 査」の概要, 参考資料, 参考2, http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/other/___icsFiles/afieldfile/2009/10/13/1285611_10.pdf, (参照日2019年1月11日).
- 文部科学省(2008b)平成20年度全国体力・運動能力, 運動習慣等調査実施要領. スポーツ庁ホームページ, 刊行物, 統計情報, 全国体力・運動能力, 運動習慣等調査, http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/kodomo/zencyo/1368269.htm, (参照日2019年1月11日).
- 文部省(1965)昭和39年度体力・運動能力調査報告書. 文部省:東京.
- 野口義之(1966)諸外国の体力テスト. 体育科教育, 14(10):15-18.
- 酒巻敏夫(1978)体力テストの実施と活用について (1). 体育・スポーツ・レクリエーション, 5(1):11-12.
- 桜井伸二(1997)アジアの国々の体力テスト. 体育の科学, 47(11):874-878.
- 笹島恒輔(1978)体力テストの問題点. 体育・スポーツ・レクリエーション, 5(1):20-21.
- 鯛谷隆・中村平・掛水通子(1984)大学3年間における形態的及び体力・運動能力的変化に関する研究. 東京女子体育大学女子体育研究所研究集録, 8:25-36.
- 体育測定研究室(1968)女子体育専攻学生(東京女子体育大学同短期大学学生)の体格と運動能力(測定結果)東京女子体育大学紀要, 3:168-180.
- 東京女子体育短期大学・東京女子体育大学卒業アルバム1958年から1984年.
- 上杉正幸(1978)体力テストの在り方をさぐる(2). 体育・スポーツ・レクリエーション, 5(1):19-20.
- 山田熹政(1978)法政大学の運動適性検査について. 体育・スポーツ・レクリエーション, 5(1):14-15.
- 山田裕松(1941)體力章検定について. 家事と衛生, 17(10):10-13.
- 山口泰雄(1997)カナダの体力テスト. 体育の科学, 47(11):864-868.
- 遊佐清有(1978)横浜市立大学における体力測定. 体育・スポーツ・レクリエーション, 5(1):9-11.
- 若山章信・服部次郎・奥野知加・鈴木政之・鶴沢文子・八尾泰寛・東山昌央・佐藤理恵・高梨雄太(2011)本学学生の体格・体力の推移—1970年から2010年のデータより—. 東京女子体育大学女子体育研究所所報, 5:37-41.
- 若山章信・八尾泰寛・東山昌央・烏賀陽信央・小野田桂子・佐藤理恵・佐々木大志(2013)体力テストによる女子競技スポーツ選手の体力標準値と競技別体力特性. 東京女子体育大学女子体育研究所所報, 7:59-72.

謝辞

聞き取り調査に快くご協力いただきました卒業生のみなさま, 先生各位に厚く御礼申し上げます。

付記

共同研究者研究担当箇所や役割

掛水 通子

全体計画, 聞き取り調査, 史料収集, はじめに, 2, 5) 卒業生や教員の考え(聞き取り調査から), まとめ, 付録1:聞き取り調査要旨の抜粋, 付録2:本学体力テスト略年表

及川 佑介

聞き取り調査, 2.1) 運営方法等に関する変遷, 2.4) 学生の感想, 聞き取り調査要旨の抜粋

烏賀陽 信央

聞き取り調査, 1. 体力テスト概史, 聞き取り調査要旨の抜粋

長谷川 千里

聞き取り調査, 2. 1) 運営方法等に関する変遷, 聞き取り調査要旨の抜粋

永井 将史

聞き取り調査, 2. 1) 運営方法等に関する変遷, 聞き取り調査要旨の抜粋

筒井 孝子

聞き取り調査, 2. 2) 測定項目の変遷, 聞き取り調査結果の抜粋

大石 千歳

2. 3) 集計方法の変遷

付録1 聞き取り調査要旨の抜粋

A1：1961(昭和36)年入学

〔学生時代〕吉祥寺では体力テストはなかった。国立に来てから和泉先生が着任し、それから体力テストが始まった。和泉ゼミで体力テストの当日の順番などを決めていた。

〔教員時代〕卒業してすぐ教員になり、体力テストでは先生が測っていた。卒業して2年目に学生数が増えた。それから1,2年生だけ測るようになったのかもしれない。

A2：1962(昭和37)年入学

〔学生時代〕(運動会の方が記憶に鮮明で)藤村女子中学、高校も大学へ来て、大運動会をした。リレー、徒競走、玉転がし、玉入れなど。和泉先生もいらっやいましたが、先生の授業は受けていない。

〔教員時代〕第三体育館に器具(垂直跳び、ロープを登るなど)を作ったのは遠山先生で、業者に特注で作った。

A3：1965(昭和40)年入学

〔学生時代〕体力テストは学校行事として1年生の時から実施されていた。1年生から4年生まで受けていたと思う。先生方が運営して測っていました。5月ぐらいか。部活の人がお手伝いしていたと思う。4年生は測ったと思う。体力テストについて学ぶ機会はなかった。反復横跳びは得意、握力ない。ジャンプ力ない。走るのも嫌い。1000メートルは駄目ではなかった。早くは走れないけど、持久力はある。

〔卒業後〕高校と中学の教員をした。中学では体力テストを必ず4月か5月にするが全て経験していたので役立った。55歳から富士登山を5回した。早くは登れなくても最後まで登れる。70歳になったら山頂にノートがあって名前を書ける。去年は自信がなくてやめたが、今年はそれをしたくて登って名前を書いた。体育大出身だから、そうそうは弱音を吐きたくないから。

〔意見〕体力は必要で、自分の体力を知る体力テストは意義がある。このまま続けて欲しい。

A4：1966(昭和41)年入学

〔学生時代〕体力テストは全員が検者と被検者のどちらも行っった。周囲と競い合っって行っっていた。記録を出すために、何回も行っった記憶がある。嫌々というのではなく、皆進んで行っっていた。昨年度よりも今年度というように、自らの記録を伸ばすことに意識をおいた。

〔教員時代〕大学卒業後、助手になった。教員は全員で、体力テストの手伝いをし、教室での測定も手伝った。教員は実技系専門でなくても、皆が協力して、体力テストを行っった。現在のように、学生が体力テストの運営していただのではなく、教員が運営していただ。20年くらい前までは、体力テスト、実習など、教員皆がともに行っっていたが、なぜかそのあたりから、実技、理論のように、分かれていっったように思える。

〔意見〕教員皆が一緒に行っっていた時代が懐かし、そうあるべきだと思っっている。そのころからなのか、行事としての体力テストよりも、クラブ・課外活動があっったの学校行事になってきたように思える。それは、「体力テストをするとか怪我をする」、「クラブ活動に影響する」からとかいう声がか聞こえるようになった。したがっって、現在では、部活動の指導者の考えが体力テスト等の行事に取っ組みす部活動の所属学生の意識に影響していっるように思える。

A5：1967(昭和42)年入学

〔学生時代〕1年生から体力テストの日があり、その日に全ての項目をしていただ。学校行事で全学年が参加していただが、測定を誰がしていただかは不明で、全員でテストしていただと思う。ただ、あるときから上級生が測定していただような気がする。結果票は渡されたような気がするが、どうなっったのかわからない。統計資料として配布されたりはしていただなかったので、どの体力が劣っっているのかわからなかつた。体力テストの結果はクラブ内で、良いとか悪いとか話していただと思う。体力テスト実行委員のようなものはなかつた。上体そらしと垂直とびの結果は良かったと記憶していただが、4年間の変化は特にみられなかつたが、持久力は低下していただように思っう。

体力テストは大学に入っって初めて行い、ボール投げなどは大胸筋を使う種目は成績が悪かつた。体力

テストについて学ぶ機会は、大学の授業ではなかった。測定者になったときに始めて学び、コーチの資格をとったときに学んだ。

〔意見〕体育大学として体力テストは必須で、絶対に行ったほうがよいと思う。各種目について知ることにもなるし、自分の能力で足りないもの、体内能力もわかる。これから教育者となったとき、どのような種目を専門にしているとどのような体力が足りないのか、バランスよく力をつけるために何をしたら良いか、わかるようになるので、是非指導に生かすためにもしたほうがよい。また、学生の頃と年をとってからの比較もできる。

結果を年毎に出せば、ある程度の波があり、その変遷が見られるので学生の体力や日本人の体力などを見る上でも統計学的解析は必要だと思う。

実行委員になった学生は、体力テストが終了するまで頑張り、体力テストについても理解を深め、体力テストの運営についても学ぶことができるので、とても良いと思う。

現在は、検者は3、4年で、被検者は1、2年であるが、できれば、被検者として1年から4年全員実施がよいと思う。2日にわたってでも、したほうがよいと思う。理由は、体力テストに取り組む姿に対し、認め合う、励まし合うことができ、上級生と下級生との一体感が味わえると思う。現在は、自分だけ成績がよいのを良しとしない風潮があるので(自分だけ周囲から突出していることを恥ずかしいと思う、頑張りすぎるのが恥ずかしい)、そうではいけないと思う。

必死にする姿を、皆が応援する、それが大事だと思う。シャトルランなどは、皆が運動能力も優れているのに、すぐにあきらめてしまう学生も多い。そのようなことではなく、何事にも真剣に取り組む昔の学生の姿勢は美しく、それを応援する姿も良かった。是非、そのような環境で続けて欲しい。

A6：1970(昭和45)年入学

〔学生時代〕体力テストは学校行事として行われていた。記憶は鮮明ではないが、下級生のときに測定を受けたと記憶している。また、測定を行った記憶もある。教員が主導で、計画を立て、学生に指示して運営していた。方法は4年間特に変わらない。体力テストに

ついて学ぶ機会はなかった。1000m走や50m走では、クラブとして上位を目指していたことから、大変だった。〔教員時代〕以前は体力テスト当日に会議などもなく、ゼミ生(測定者)の指導を依頼されていたため、体育館に向いていた。現在は、会議や健康診断などが体力テスト当日に入っており、なかなか体力テストに協力できていないが、時間があれば、ゼミ生を見に行くようにしている。

A7：1972(昭和47)年入学

〔学生時代〕体力テストは学校行事として行われていた。学生全員が精一杯取り組んでいた。運動会のような盛り上がりであった。現在と変わらず、1、2年生が受検し、3、4年生が測定していた。和泉先生が中心となっていた。体力テストについて学ぶ機会はなく、測定結果について報告もなかった。

〔教員時代〕平成9～12年ころ女子体育研究所運営委員であった。学生中心に運営していたが、教員が出すぎていた印象がある。その時は、出席率にこだわり、100%を目指していた。

〔意見〕他大学では、体育実技の授業の中で体力テストを行っているところもあり、比較的のんびりと測定しているようである。体力テストは、体力の現状を確認する意味で、頑張りずに行ってもいいのではないかな。

A8：1972(昭和47)年入学

〔学生時代〕体力テストは学校行事として行われていた。現在と変わらず、1、2年生が受検し、3、4年生が測定していた。運営の主体は分からないが、教員が関わっていた。各種目を終えた証明となる印鑑は教員の名前のものであったと記憶している。体力テストについて学ぶ機会はなかった。1、2年生の時に受検した際、測定したかどうか不正がないよう、色鉛筆で種目ごとに色分けして記録を記入していた。

〔教員時代〕以前は女子体育研究所運営委員でなくても、教員全体が測定箇所割り当てられ、見回りを行っていた。

B1：1975(昭和50)年着任

〔教員時代〕1975(昭和50)年に本学に着任した時か

ら体力テストは行われていた。全学挙げて実施していた。何年生が測定し、何年生が受けていましたかは思い出せない。和泉貞夫先生が中心になって運営していた。和泉ゼミ生もかなり関わっていたと思う。和泉先生は1962(昭和37)年の大学開設時に着任された測定評価を専門とする先生で、「女子の身体的理想像」の研究をしていた。着任前は東大の先生だった。東大は今でもそうだが、体力テストを実施し、結果の分析、体力やトレーニング研究が進んでいるので、本学でもすぐに実施できたのだと思う。

助手時代(1975年度から1978年度)に和泉先生の授業を何回か手伝ったことがある。私が女性なので、男性の和泉先生では困ることがあるので頼まれていたのだと思う。何年度かは思い出せない。授業のなかで胸囲を測るなど、身体測定を手伝った。学生は授業で身体測定のことを学んでいた。また、集計も手伝ったことがあるが、パソコンはない時代で、電卓を使って平均と標準偏差を出していた記憶があり、電卓を叩いていた。

その後、教員の関わり方が最も変化した。私が着任したときはすでに、教員が測定していなかったが、教員の誰かは必ず一日中測定場所に来て、学生を指導し記録用紙に教員が印鑑を押していた。学生実行委員会が運営するというを理由に、教員が次第に関わらなくなり、顔を見せる程度になっていった。今では、学校行事であるのに、同時に教職員健康診断が行われ、いくつかの各種委員会まで開かれ、女子体育研究所運営委員以外の教員はほとんど関わらなくなった。顔さえも見せに来ない教員がいる。

次に学生の測られ方が変化した。かつては、服装も大学指定で動きやすいもので、全力で取り組んでいたように感じた。今では、中には全力で取り組んでいる学生もあるが、服装も測られ方も適当で、自由を尊重するのはいいが真面目さが感じられない学生が多くなったように感じられる。

私も長い間、学生に混じって全種目ではないが、体力テストを受けていた。受けることができたということは、教員は交代制だったのだと思う。

〔意見〕学校行事とするなら、全学挙げて教員も関わって実施してほしい。

A9：1983(昭和58)年入学

〔学生時代〕体力テスト学校行事として春に実施され、上級生が測定していた。1,2年生が受検していた記憶があるが、3年生以上については定かではない。委員の学生がいたような記憶や、教務補佐員が働いていた記憶がある。教員が中心だったのではないかと、実技、特に陸上の先生方が中心に運営されていたと記憶している。学生時代4年間の間で大きな変化はなかった。体力テストについて学ぶ機会は特になかった。4年間で自分の記録は劇的に向上した。大学2年生の体力テスト前はオリンピックの強化合宿が続いており、その影響も大きかったのかもしれない。

〔意見〕新体操競技部の体力テストの結果は非常に偏っている。ノーマルな結果が良いかどうかは分からないが、「この部活のこの体力要素を伸ばしたい」という状況があれば、必要に応じてノウハウの共有ができると思う。例えば新体操は柔軟性を高めるノウハウを持っている。逆に速く走る(速いリズムで体を動かす)能力は新体操でもとても重要だが、その能力を高めるノウハウは持ち合わせていない。クラブ毎の結果の集計だけでなく、情報やノウハウの共有ができるより良いと思う。

学生は部活を気にして体力テストには「ほどほど」に取り組んでいるように思える。全力で取り組んだ方が部活にも良い影響があるはずである。そのように取り組ませるためにどのようにしたらよいか課題だ。

A10：1985(昭和60)年入学

〔学生時代〕体力テストは学校行事として春に実施されていた。3,4年生が測定し、1,2年生が受検していた。上級生が測定についていた印象が強いが、運営が誰であったかはわからない。学生時代4年間の間で変化は特になかった。菅沼先生の授業で、「体力テストとは」や「測定方法」について教わった。

1年生の時は測定方法もあまりわからずしていた。先輩たちがいらして緊張した。2年生の時は記録を伸ばそうと思って行った。3,4年生の時は自分たちがやりづらかったところを楽しみながら測定できるよう工夫した。疲れて翌日が筋肉痛だった。

〔教員時代〕40歳を過ぎて、健康運動指導士の資格

取得の際に体力テストを受験する機会があり、最後の機会だと思い全力で取り組んだ。大学時代に全力でできていたかは疑問があるので、学生たちには、全力で取り組むことを伝えていきたい。実行委員の学生が本当によくやっている。

体力テストのデータがきちんと残っていることについて、教員になって改めてすごいことだと感じている。クラブ毎の結果をみると、特徴は変わっていないことがはっきりとわかる。新体操についても記録の高低はあっても特徴は変わっていない。

[意見]この結果が「彼女たちの最高なのか」と思うので、全力で取り組んだ結果を見てみたい。体力と競技力がどのような関係にあるかを知りたい。新体操では記録を出そうとする意欲が競技力につながっている気がする。体の力だけでなく気持ちの力と競技力の関係が興味深い。

新体操では弱くなる(競技成績が低下する)前兆のあった年頃(8年程前)から、体力テストの結果が落ちている傾向がある。1,2年生が中心なので、体力テストの結果が低下したこと、その後に競技成績が落ちてきたことは関係があるのかもしれない。

コーディネーション能力が測れる方法があれば計測してみたい。競技力が高い学生はコーディネーショントレーニングもすぐにできるが、今の学生は時間がかかる。授業では縄跳びができない、ラジオ体操で手足が同時に動かないような学生もいるので、そのような測定ができれば良い。

A11：1989(平成元)年入学

[学生時代]4月下旬か5月上旬に体力テストの日があり、その日に全ての項目をやっていたが、1日だったか2日だったかはよく覚えていない。1年生～4年生まで実施し、3,4年生が測定していた。当時は怪我をして体力テストができない場合、種目ごとに「許可申請」という書類を出していたように思う(「許可申請」は骨折などで受けられないことを許可する書類)。運営はたぶん学生だったと思う。当時はダンス部員で、柔軟性はあったし、4年間で柔軟性がさらにあがった。他の学生たちは、入学時点でかなり体力がある人ばかりで、4年間ほぼ体力は変わらなかったようだ。体

力テストについて学んだのは、測定統計の授業だったと思う。2年次の授業で、部活として体力テストを学ぶより、3年で検者として体力テストに参加し、学んだ。

当時、握力が右:55kg,左53kgの友人が周囲に多くいた。自分はそんなにはなかったが、ダンス部、新体操部は外見ですぐわかる細身であったが、当時のほかの部活の学生は皆がっちりしていて、メンタルも高かった。新体操部の持久走がかなり早かった(特にBクラス)私が学生のときは、運動が学力のどちらかがすごい学生が多かった。しかし、今は運動能力が低い学生が結構いるように思う。この学生たちは体力テストの結果も悪いのではないかと、洞察力や判断力も低いのではないかと。身体能力の高い学生はこれらの能力も高かったように思う。

[意見]体育大学なら、できれば1年から4年まで測定したほうがよいと思う。体力も落ち、行動力も落ち、自己の体力と競技力への意識レベルが低いと、体力テストをやらなければならないからやっている感じがする。以前はもっと周囲に目を向け、自身の体力と競技力について考え、しっかりと意識を持って体力テストに臨んでいたように思う。

A12：1997(平成9)年入学

[学生時代]体力テストは学校行事として行われていた。現在と変わらず、1,2年生が受検し、3,4年生が測定していた。運営は学生が主体であったと思う。学生時代4年間の間に持久力のテスト項目が、1000m走からシャトルランに変わった。体力テストについて学ぶ機会はなかった。現在と比べて、運営の仕方や測定項目(一部変更があったが)等は変化がない。

[意見]平成27年に女子体育研究所運営委員として、体力テストの責任者を担ったが、表向きは学生主体で体力テストは行われているものの、教員の指導なくしてはスムーズな運営ができない。また、学生同士の引継ぎが重要だと考える。体力テストの意義や目的について、4月のオリエンテーションで実行委員学生から説明されているが、もっと意義や目的、結果の活かし方など、学ぶ機会があればと思う。

A13: 1999 (平成11) 年入学

[学生時代] ①体力テストは学校行事として行っていた。運営は、おそらく全教員で、1, 2年生が受けて、3, 4年生が測定していた。学生時代4年間の間で変化は記憶にない。オリエンテーションはあった。オリエンテーションが体力テストだと思って、運動着でいったことを覚えている。体力テストでは人が多かった。ハンドボール投げのときなど、待ち時間が長かった。部の先輩たちが測定してくれて、「今年の1年はどうだ?」などと言って、盛り上がっていた。握力と背筋、垂直跳びは第3体育館で、部活の先輩がいた。立ち幅跳びはセンターホールで行った。肺活量もセンターホール。シャトルランがきつい。両サイドで応援してくれた。嫌々測定をしていた学生はいない。みんながモチベーション高く行っていた。記録をあげてやろうという気持ちで行っていた。手を抜くのは考えられない。ハンドボールのボールが大きくて、記録が出ず、悔しい思いをしたことを覚えている。

クラスごとで測定していて、そのクラスの中での部活で動いていたと記憶している。なぜか、50m走はだして走る学生が多かった。自身が学生の時に、1年から2年で記録が伸びたと記憶している。ほとんどの学生が部活に所属していて、当時の寮はほとんどクラブ員であった。所属していた部ではアルバイトは禁止であった。

[教員時代] 卒業後、6年間外で社会人を経験したあと、東女で教員(助教)として働きはじめた。女子体育研究所が運営していた。初年から女子体育研究所の研究員をつとめた。

C1: 2001 (平成13) 年度から2002 (平成14) 年度
女子体育研究所所長

当時、公開講座を始めて、女子体育研究所が担当しており、そちらに力入れており、体力テストのことはあまり覚えていない。また、文部省から知的財産を作るように言われて、「教員情報」を作った。

バレー部のマネージャーで●●ゼミの学生さんが実行委員長をしていた。文部省へ見教のデータを送っていた。鈴木先生が集計していた。

先生たちが体力テストに来なくなったと聞いている

が、先生も体力テストに来てほしい。

C2: 2005 (平成17) 年度から2008 (平成20) 年度
女子体育研究所所長

所長時代、当時本学初の第三者評価の実施等があり他の業務が多く、体力テストについての詳細は記憶が定かでない。当時の体力テスト責任者の●●先生の記憶が確かだと思うので、そちらを参考にしてほしい。

●●先生が所長時代(平成5年～平成8年の間)で私が責任者を務めた際に、変更を行った。内容は早朝に陸上グラウンドに全体集合し、学長挨拶の後、一斉スタートする形だったものを現在の教室受付方式に変更した。理由としては近所からの苦情(早朝の放送設備の使用)が挙げられる。

C3: 2009 (平成21) 年度から2014 (平成26) 年度
女子体育研究所所長

(C2所長, C3運営委員時代の改革・改善)

2005 (平成17) 年 エクセルによる結果出力シートを新たに作成(それまでは●●氏が作成したエクセルワークシートであった)

2006 (平成18) 年 データ入力をマークシートによる読み取りへ。

2007 (平成19) 年 成績上位者表彰(学長賞・研究所長賞等, 学長の了解を得て)。体力テスト不参加に病院の診断書が必要とされていたものを、健康管理センターでの問診に変更。

2008 (平成20) 年 スポーツ医学ゼミ所属3/4年生を、メディカルスタッフとして各測定場所に配置。

(所長時代改革・改善)

2009 (平成21) 年 体力テストマニュアルの刷新(森直幹名誉教授に動感画を依頼)。

2010 (平成22) 年 大学3年生以上、クラブ所属者の測定実施(希望クラブ)女子研としてはデータ収集、クラブ(学生)にとってはチーム全体の総合的体力評価の活用のため。

(所長時代に改革・改善したかったが出来なかったこと)

○チューター制度の導入

入学したての1年生は学内の施設に不慣れなため、例えば大学3年生が同じ学籍番号(下3桁)の1年生とペアになって、すべての測定場所を回る。短大については4年生が担当する。退学・休学等の欠番は臨機応変に。測定担当種目はゼミ単位で決まり、2年間で最大2種目しか担当せず、測定実習という意味合いから外れてしまう。チューター制度により、すべての測定において検者となること、また、クラブを超えて上級生・下級生の和が広がるものと考えた。

カップリングにかなり時間が割かれること、定刻にちゃんと集合できるか不明なこと、上級生の当日欠席(遅刻)に対する対応が大変であることから、実現できなかった。

○クラブ単位での測定実施

20mシャトルランテストや50m走などをクラブ単位で実施した場合、競争意識が働きかなり良い値が期待できると考えた。

1/2年生では実現できなかったが、2010年に大学3/4年生を加えたことで一部実現した。

(今後の体力テストに望むこと)

50m走のフライング判定や20mシャトルランテストの回数判定、あるいは、上体起こしでの背中(肩甲骨)の付き具合の判定がかなり甘い。これまで、本学の縦断的データやクラブ別平均値を研究所報に示してきたが、元データに信頼性がなければ価値はない。より厳密にテストを実施されたい。

C4: 2015(平成27)年度から2018(平成30)年度 女子体育研究所所長

(所長時代の改革・改善点)

2015(平成27)年度

表彰対象者数を見直して、大学を10位から15位まで増やした。(理由)短大の学生数が少なくなってきたので、学部学科の人数に対応させた。

2016(平成28)年度

表彰対象者数をさらに見直して、大学は15位のまま、短大は各学科3位までに減らした。(理由)短大の学生数がさらに少なくなってきたため。

2017(平成29)年度

(1)測定項目に体脂肪率を加えた。(理由)平成28年

度に女子体育研究所で『TWCPEウィメンアスリーツのためのスポーツ指導・健康手帳 スポーツダイアリー』を作成した。本手帳は、理論とスポーツダイアリーから成る。スポーツ活動、体調、自らの夢をかなえるための食事などをスポーツダイアリーに毎日記録しながら、理論を反復確認するものである。自らスポーツする心身の健康管理、コンディショニングを行うとともに、将来指導者となった時に役立たせることが本手帳作成の趣旨であった。

各体育館に体脂肪計を配置し、ダイアリーにも体脂肪率の項目を設けて測定させているため、体力テストにも加えた。

(2)体力テスト報告書の印刷は外注することにした。(理由)体力テスト実行委員の事後の処理のための負担を軽減するためである。体力テスト後、4年生の体力テスト実行委員は就活、教育実習等で忙しく、体力テストの仕事をする余裕がない。また、印刷は学生の仕事ではないと判断したが、事務職員も正規1人、アルバイト1人で印刷作業が出来ないためである。

(3)1年生の必修授業「トヨの教育」の時間を1時間割り当ててもらい、『TWCPEウィメンアスリーツのためのスポーツ指導・健康手帳 スポーツダイアリー』と併せて体力テストの指導を行うことにした。従来から行っていた成績上位者の表彰、個人データの返却に加えて、個人データの読み方の講義をすることにした。また、『TWCPE Tウィメンアスリーツのためのスポーツ指導・健康手帳 スポーツダイアリー』のなかにも体力テストの振り返りのページが設けてあるので、手帳と一体化して指導することにした。2年生についても授業の一部を借りて、短時間でデータ返却と成績上位者の表彰、個人データの読み方の講義をすることにした。(理由)体力テスト結果を学生にフィードバックして、これからの体力作りに生かすため。

(4)体力テストマークシートの点検とデータの読み込みを、学生実行委員の仕事から事務職員とアルバイトの仕事に変えた。(理由)従来、学生実行委員が授業の空き時間に点検とデータ読み込みの仕事をしていたが、まとまった時間が取れず、作業が飛び飛びとなる。また、このような仕事は実行委員の仕事ではないと考えた。

(5) 4月のフレッシュウイークの体力テストオリエンテーションを体力テストと手帳指導に一体化した。(理由)自己の健康と体力作りを一体化して考えてほしいこと。折角の45分ほど使える時間を有効利用するため、2018(平成30)年度

(1) 体力テストの記録は、直接マークシートに記入するようにした。(理由)従来、体力テストの記録は記録用紙に記入後、マークシートに転記していた。その際、転記ミスが多かったので、転記ミスを発生させないため、

(2) データ返却、表彰、『TWCPEウィメンアスリーツのためのスポーツ指導・健康手帳 スポーツダイアリー』指導と併せて体力テストの講義を充実させた。(理由)体力テスト後の指導を充実させるため

(3) 学生実行委員会の委員募集方法の追加

実行委員は運営委員のゼミナール所属学生から選ぶという形が続いている。委員を終えた学生は、委員になって良い経験ができ、勉強になったと感謝してくれる。

本来は、全学生に対して学生実行委員会募集ポスターで募集しているが、応募してきた学生はこの4年間にはなかった。平成31年2月に、次年度3年生と4年生に対して大学一斉メールを用いて、31年度委員の募集を試みた。

〔改革・改善したくてもできなかったこと〕

(1) 女子体育研究所データ集計システムの構築

女子体育研究所独自の集計システムを構築したかったが出来なかった。前所長の作成したソフトウェアをそのまま使ったため、前所長を煩わすことになった。運営委員、事務職員が変わっても使えるシステムを構築することが課題である。

(2) オリエンテーションの出席率の向上

4月のフレッシュウイークの体力テストオリエンテーションには1年生はほぼ全員が出席している。しかし、上級生は元々学生部の計画は学生の欠席を予測して、全員来たらセンターホールには入りきれない計画になっており、実際に2から3割程度の出席率である。学生が出席する計画とするよう、学生部には何回も頼んだが、実現できなかった。

〔今後の体力テストに望むこと〕

(1) データの信頼性を向上させる

現在の体力テストのデータは信頼性に欠ける。体力テスト実行委員がゼミ代表に伝え、ゼミ代表がゼミ生に伝えている。正確に伝わっているかどうか不安がある。学生実行委員会が主体となってから、測定場所に教員が貼り付かなくなったため、測定方法の誤り等の指導がされにくくなった。学生主体であっても、それを教員が指導する必要性があると思う。また、教員側も体育大教員でありながら、体力テストに関して勉強しなければならない。

(2) 教職員健康診断日程の変更

いつからからか思い出せないが、体力テストの日に教員の健康診断が実施されている。健康診断がなくても、同じかも知れないが、測定場所に指導に現れる教員が減っている。健康診断は別日程にすべきではないか。

(3) 会議を設定しないでいただきたい

前記と同様、各種委員会を学校行事である体力テストの日に開催しないでいただきたい。

(4) 全学生を被検者としての実施を

現在は1年生と2年生が被検者として体力テストを受けているが、日程を工夫して3年生4年生も受けるようにして欲しい。本学学生は体育大生と言いながら、クラブ活動に入っていない学生は学年進行とともに体力が低下しているように感じる。

C5: 2011(平成23)年度から2014(平成26)年度

運営委員、2011、2012年度体力テスト責任者2年間で実践したのは、「とにかく記録に残す」でした。この資料も当時のメモをみながら作成していますが、お陰様でありありと当時の状況が目に見えられます。実施記録の作成と引き継ぎについて

運営担当を任せられた一年目、前任の先生からフォルダデータをパスされました。そのデータを時系列に整理し、内容を理解することに苦勞しました。2年間でデータを整理するとともに、作業メモ、そのときどきの所感を記録しておきました。これにより、特に2年目の運営、そして次年度の先生への引継ぎがスムーズに行えました。「前事忘れざるは後事の師なり」(戦国策)をあらためて実感しました。

一年目の反省点

一年目は学生実行委員長、副委員長に対して、適切なサポートができずに終わりました。理由は、全体をコントロールする立場である学生実行委員長と良い関係が築けなかったためです。そのときの学生委員長は良く言えばおおらか、悪く言えばずさんなところがありました。今思うと、彼女に対して後者の部分への指摘が多すぎたかなとも思います。事後の慰労会でも、「おつかれさま」の一声がどうしてもかけられませんでした。未熟であったと痛感しました。学生側もつらかったと思います。

学生委員長の選任方法

実行委員長を選任する際には、前年度の副委員長2名のいずれかが選ばれるという慣例がありました（今もでしょうか?）。私は担当した一年目、2名のうち、指導するクラブに所属する学生を指名しました（人柄も知っているし、連絡が取りやすいからという理由）。しかし、前年度に運営で汗をかいていたのはもう一人の学生であり、選任した委員長は流れを把握していませんでした。選ばれなかった学生からは、「この選任について少なからず違和感があった」と後から聞きました。運営のエンジンとなる彼女たちが納得して、意欲的に取り組めるような選任のあり方が必要と実感しました。そのためには、前年度の担当者をはじめとする教員側が、学生委員長、副委員長とコミュニケーションをとること、人柄等も含めてよく把握しておくこと、そしてそれを翌年の担当者に伝達することが重要と思いました。

学生委員長と副委員長との関係づくり

一年目の初期のころ、前任の先生の言う「体力テストは学生主体の運営」を鵜呑みにしておりました。そのまま会議に臨んだ結果、学生委員長が会議で説明する内容は、断片的、部分的な作業内容の伝達に終始しており、運営のあり方をみな共有するものではありませんでした。ある面しょうがないとは思いますが、こちらも適切なサポートが必要だと感じました。そこで2年目は、学生実行委員長、副委員長に対して、「委員長・副委員長は全体に指示を出す立場であること」「他の運営委員には気持ちよく仕事をしてもらうこと」の理解を促す働きかけをおこないました。具体的には、各作

業が運営上のような意味があるのか、なぜ必要なのかを、ともに確認しながら進めました。運営委員会議前に、学生実行委員長が会議のために作成した資料（次第）をともに確認する、用具の確認の必要があれば一緒に女子研に行ってみる、など。また、折にふれて、仕事を前に進めてくれることへの感謝を伝えました。「それなりに重たい荷物を一緒に運ぶ」心構えで、彼女たちとともに運営に臨みました。2年目の慰労会では、委員長たちに「おつかれさま。ありがとう。本当に助かった」と言うことができました。

その他

私が担当した年は震災の年でした。計画停電があり、それが健康診断と重なり、さらに健康診断の予備日が体力テストの午後と重なるなど、関係部署とさまざまな調整が求められました。枠組みの変更の可能性もふまえて準備を進めることは大変勉強になりました。当時、運営委員であった●●先生と密に連絡を取りながら進めたことをよく記憶しています。細かい確認を取りすぎて鬱陶しがられたこともありましたが、ボールをなげると逐一反応してくれたので、安心して仕事を前に進めることができました。最近、ゼミ生から当時と似たようなボールが飛んできますが、当時のことを思い出しながら投げ返しています。そこに物事をともに進めるうえでの大事なヒントがあるようにも感じています。

特に運営の改善点は思いつきません。本学（現在所属大学）でも体力テストを実施していますが、東女体の運営体制がどれだけよく考えられたものであったのかを実感しています。本学でもいずれ、学生と教員がともに作りあげる体力テストの構築を実現したいと思っています。

（掛水通子・及川佑介・烏賀陽陽央・永井将史・長谷川千里・筒井孝子）

付録2 本学体力テスト略年表

(未完：平成31年1月31日現在)

年度	実施日	主な事項や変更点	集合	移動	被検者	検者	測定項目	データ処理, その他
1962	昭和37年5月中旬2日間	体力テスト開始(体育測定研究室和泉貞夫を中心に運営)			大学1年, 短大1,2年	当初教員も, 以後4年3年	体格30項目 運動能力20項目	
1963	38年5月中旬2日間				大学短大1,2年			
1964	39年4月中旬2日間				〃			
1965	40年5月か4月中旬2日間	和泉貞夫, 本学紀要第1号に, 「女子体育専攻学生の体格と運動能力について」(1966)報告						各項目学年別(t検定), 学科別, 運動部別分散分析(F検定), 運動部別1年間の変化(和泉, 1966)
1966	41年〃						この頃から体格15項目 運動能力15項目	
1967	42年〃	川口道子, 本学紀要第3号に, 「本学における測定実施報告—体格と運動能力—」報告 体育測定研究室, 本学紀要第3号に女子体育専攻学生(東京女子体育大学同短期大学学生)の体格と運動能力(測定結果)(1968)報告						1年生と2年生について, 5力年の趨向性の検定, 大学, 短大別平均値の比較, 1年次と2年次の比較(川口, 1968)
1968	43年〃							
1969	44年〃							
1970	45年〃							
1971	46年〃	片山道子, 本学紀要第7号に, 「本学における測定実施報告—体格と運動能力—(その2)」(1972)報告						年度別平均値の推移, 体育専攻学生10力年間の推移, 幼児教育科学生4力年間の推移(1972, 片山)
1972	47年							
1973	48年							
1974	49年							
1975	50年							
1976	51年							
1977	52年						このころ運動能力13項目	昭和52～昭和61年度, 学年別に参加人数, 平均値, 標準偏差, 最大値, 最小値を算出
1978	53年							
1979	54年10月26日と他の日				大4も実施			
1980	55年							

1981	56		女子体育研究所, 本学紀要17号に「本学学生の体力テスト結果-IV-昭和52年度~昭和56年度」(1982) 報告							
1982	57		女子体育研究所, 本学紀要18号に「本学学生の体格と運動能力測定結果」(1983) 報告							
1983	58									
1984	59									
1985	60	5月22日 (水)	この年から女子体育研究所, 「体力テスト結果報告書」発行	陸上 競技場		大学短大 1,2年	3年 4年 一日	形態4項目,機能10 項目,運動能力4項 目計18項目(見教 1000走なし)皮脂厚 は腹・背・上腕	記録用紙からパソコンへ入力 (全種目受検者のみ)	
1986	61	5月14日 (水)	女子体育研究所, 本学紀要22号に「体力テスト結果」(1987) 報告	学年別 に 体育館・ 教室	ABC DE群 で	〃	〃	〃	記録用紙からパソコンへ入力, 測定値体力測定処理プログラム (芝教授作成)により処理. 体 格指標, 体力指標とする)につ いて, 平均値, 標準偏差, 最大 値, 最小値, 度数分布を算出. また, 平均値と標準偏差を用 いてTスコア算出. 学生の個人 プロフィール作成	
1987	62	5月13日 (水)		午前: 陸上 競技場, 午後: ソフト ボール場	ABC DEF 群で	〃	〃	〃	学部・学科ごとの平均値の差 の検定, 「種目別・運動クラブ別分布」, 「種目別年次推移」加える	
1988	63	5月18日 (水)		陸上 競技場	〃	〃	3年 午前 4年 午後	〃 皮脂厚の腹なくなる	「気象条件」を資料に残す 20年間の体力の推移を種目別 にグラフ作成 腹部皮脂厚測定中止〔計算に 不要〕	
1989	平成 元	5月24日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	「年齢別」集計加える	
1990	2	5月16日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	〃	
1991	3	5月15日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	〃	
1992	4	5月13日 (水)		〃	ABC DE群 で	全学生	〃	皮脂厚・肺活量・ 片足立ち片足爪 先立ちなくなる. 形 態3項目, 機能8項 目, 運動能力4項 目計15項目(見教 生1000走なし)	記録用紙から入力カードに転記 して提出	

1993	5	5月19日 (水)		〃	〃	〃	4年 午前 3年 午後	〃	学部・学年別体格に関する各指標、および体力テストの結果に関する各指標について、平均値、標準偏差、最大値、最小値、度数分布を算出。このほかの部分について、年度による様々な違いがみられた。記録用紙の確認を受けて提出		
1994	6	5月18日 (水)	この年から『体力テストマニュアル』配布 報告書の発行時期を早めた	なし 教室で 受け付 け後開 始	〃	〃	大学 短大 1,2年	3年 4年	〃	最大値、最小値の記載がなくなった。クラブ別の平均値を算出し、平均値の比較、また、大学・保体に関してはクラブ別にプロフィールを作成し、児教については学年別に体力プロフィールが作成された。さらに、「自分の体力プロフィールを作ろう」という記事が掲載された。種目責任検者の感想記載、被検者の感想記載、計画と準備記載	
1995	7	4月26日 (水)	『体力テスト実行委員会』発足 し学生主導で運営	〃	〃	〃	〃	〃	児教生は座高も実施 (文部省に報告の ため)	児教1, 2年に対してアンケートを実施し、質問項目に関する平均値と標準偏差も算出。	
1996	8	4月24日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
1997	9	4月23日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	13項目 児教生は 座高も実施、斜め懸 垂と胸囲なし。立位 体前屈→長座体前 屈、1000m走→20 メートルシャトルラン、 走り幅跳び→立ち 幅跳びに変更。上体 おし加わる	児教アンケートの回答結果に基づいた、項目別体力プロフィール作成。	
1998	10	4月22日 (水)	この年から女子体育研究所、 『新体力テスト結果報告書』 発行	〃	〃	〃	〃	〃	新体力テスト8項目 に本学独自の項目 (身長・体重・背 筋力・垂直跳び) を加えた12項目児 教13項目	基本的に例年、各体格指標・各体力指標に関して学科・学年別に参加人数、平均値・標準偏差、Tスコアを算出し、平均値の差の検定を行っている。またクラブ別に平均値と標準偏差を算出し、平均値の比較を行うとともに、クラブ別体力プロフィールを作成。	
1999	11	4月21日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	各体格指標・各体力指標に関して、学科・学年別に参加人数、平均値・標準偏差、Tスコアを算出し、平均値の差の検定を行っている。また、その結果と18歳、19歳の全国平均のデータとの比較も行っている。さらにクラブ別に平均値と標準偏差を算出し、平均値の比較を行うとともに、クラブ別体力プロフィールを作成
2000	12	4月26日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	

2001	13	4月25日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	データ入力に新方式. 各学生の個人データの掲載はなくなった. また, 体格指標・体力指標に関して, 各指標の相互の相関係数のマトリックスが掲載されるようになった
2002	14	4月24日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	データ入力にパソコンを導入 クラブ別集計において学内クラブ・学外クラブごとの集計導入
2003	15	4月23日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	
2004	16	4月21日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	
2005	17	4月27日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	クラブ別集計において学内・学内区分なくなった. 変動係数算出. 児教のアンケート結果は, 回答のヒストグラムのみ掲載
2006	18	4月26日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	記録用紙からマークシートに転記, マークシートを回収. 児教アンケートがなくなった. 学科・学年別の体格・体力の年次変化(増加率)のグラフ掲載
2007	19	4月25日 (水)	報告書に体力テスト成績優秀者掲載(大学各年5位, 短大各年3位まで表彰), テスト結果の早期返還	〃	〃	〃	〃	〃	〃
2008	20	4月23日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	〃
2009	21	4月22日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	〃各体格指標・各体力指標に関して, 学科・学年別集計(大学1年, 2年, 保体1年, 2年, 児教1年, 2年)およびクラブ別集計, クラブ別の体力・体格プロフィールが掲載. さらに, 学科別, 体格・体力の年次変化, および体格・体格データの変動係数, 相関マトリックス
2010	22	4月21日 (水)	クラブ所属の3年生, 4年生に測定機会を設ける 体力テスト成績優秀者数変更(1, 2年生合計で大学10位, 保体5位, 児教5位, クラブ3・4年5位) 若山章信ら女子体育研究所所報5号に「本学学生の体格・体力の推移 —1970年から2010年のデータより—」(2011) 報告	〃	〃	〃	〃	〃	〃
2011	23	4月20日 (水)	表彰式開始 (1, 2年生のみ, 当初, 受賞者のみで)	〃	〃	〃	〃	〃	〃

2012	24	4月25日 (水)	若山章信ら(2013)女子体育研究所所報7号に「体力テストによる女子競技スポーツ選手の体力標準値と競技別体力特性」報告	〃	〃	〃	〃	〃	〃
2013	25	4月24日 (水)	授業の一部時間を借りて表彰式(1年生は「藤村トヨの教育」の一部、藤村総合教育センターで、学長賞学科1人学長室で、学長賞は平成26年度まで)	〃	〃	〃	〃	〃	〃
2014	26	4月23日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	〃
2015	27	4月22日 (水)	体力テスト成績優秀者数表彰者数変更(学生数を考慮し、1,2年生合計で大学15位、保体3位、見教3位)クラブ3・4年5位は同じ。 個人データの返却は表彰式と同時に。	〃	〃	〃	〃	〃	〃
2016	28	4月20日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	〃
2017	29	4月19日 (水)	1年生「藤村トヨの教育」の授業1コマ90分を使用し、女子体育研究所が平成28年度に作成した『TWCPEウィメンアスリートのためのスポーツ指導・健康手帳 スポーツダイアリー』の指導と併せて表彰式実施。自己の健康、体力を総合的に自己評価させ、体力テスト結果の見方などの講義。	〃	〃	〃	〃	体脂肪率が追加され13項目	〃
2018	30	4月18日 (水)		〃	〃	〃	〃	〃	記録をマークシートに直接記入(転記ミスをなくすため)